

は内氣で、テキバキと男と話すことは出来ぬ。併し今日は丁度子供の守りをして居る所なので、手持無沙汰で無く子供に托して、大變に樂に男と話が出来ぬ。よく女の情を穿ち、また寫した姿も面白い。

草津の湯みやうもんらしい人は無し

草津は江戸から遠いし、且つ悪性の皮膚病等に効があると云ふので、随分見苦しい病人などばかり湯治に來てゐる。見え坊遊山などの湯治客は一人も居ない。こゝは眞劍に湯治に來てる人ばかりだ。

笑ひ止むまで灸點を待つてゐる

灸をするて貰ふ人が何か可笑しくて笑ひ出した。その人のうしろに女房かなんか線香を持つて、笑ひで肌が動いて點けられないので、暫く笑のとまるまで待つてゐる可笑味。

櫻花兄は蒼のあるを取り

弟は満開のを折るが、兄の方は、蒼のある方が生けて樂しみの長いことを知つてゐるので、蒼のある枝を選んで折取る。その兄は兄だけに云ふ様子を寫した。斯う云ふ句は或人には大變に面白く思はれるが、寫生で無くて机上で作つたと云ふ所がある。

「草津の湯」上野國にある有名なる温泉。「みやうもん」名聞なり。見えを張ること等を云ふ。

江の島で鎌倉武士は片はたご

鎌倉時代の所謂鎌倉武士は、旅行の出がけか歸りに、晴れくした遊山地たる江島へ立寄つたであらう。片はたごは晝夜通しての宿泊で無く、夜泊るだけの事であらう。

鎌足へ眞裸でのいとまご

前の「江の島で一日雇ふ大職冠」の註参照。海人が裸で、鎌足公に暇乞する、その異状の可笑味。

甚し人怪かり

○若後家のふしやうくに子に迷ひ

ちと嚴しい句である。男が欲いけれども、子があるからと普通の母が子に迷ふやうで無く、よんどころなく子に迷つて暮らしてると云ふ所。「ふしやうく」が命。

羽子板を預けて帯を締めなほし

少女が、羽子板を一寸人に預けて、帯を締直して居る所。浮世繪を見るやうな句。

おみさまの聞きあきをする祭前

「おみさま」は「御身様」である。町内の人の互に呼合ふ稱であらう。「あなた」よりは親しく、「おみ」よりは丁寧な呼び方で、いつも顔を合はせて居て、そこに隔てのあつた間で斯う云つたのであらう。祭禮の前、よく相談など

するので。「おみさまく」ばかりよく聞く、と云ふのであらうか。

外科を祭の形りて呼びに行き

祭に喧嘩か何か騒ぎがあつて、怪我人が出来た。それで華やかな浴衣姿か何かで、外科醫者を呼びに行く所。

「外科」外科醫者のこと。文字を見違へて斯くも呼びしと見えたり圖書刊行會本に、この「外科」を「外科醫者」と改めあるは、やり過ぎたり。原書には「外イ料」とあるものを。

尻持に和尚を持つて地紙賣

どこかの寺の和尚の最負のかけまが、このごろ、その和尚を後援者として、地紙賣をやつてると云ふ所。かけただけに後援者を尻持と云つたのである。

「地紙賣」扇の地紙を賣る者。古扇を出だせば即時新しき地紙を合はせくるゝなり。伊達なる装ひして、地紙賣を五六つも重畳肩にか

つぎて賣歩く。多くかげま上りがこの行商をしたり。

男なら直ぐに汲まうに水鏡

水汲む前に一寸水鏡をする女の様を見ての感歎である。これも命の無い机上作である。

「犬蓼」長大にして黒斑ある野生蓼。「無常門」葬を出す時のみに使ふ門。

犬蓼の快く這ふ無常門

大きな屋敷等では、無常門の設けがある。常は締め切つてある。今も葬の時、常の門から出すを忌んで、竹を輪にしたるを懸け、それを無常門に擬して出す習はしがある。闊切つてある無常門に、犬蓼が思ふ存分這ひ伸びてるる光景。「こゝろよく」が面白く云つてある。

「真崎」今も淺草區地方橋場町の東南に在る稻荷社。この頃この社前に田樂茶屋多かりき。

真崎まつさきでさればぐらゐは化まじかされる

真崎まつさきはもう吉原よしはらに一足あしといふ所ところである。「真崎まつさきはこゝまで来てといふ所ところ」は、行くことを勧める方ほう。この句の「されば」は勧められる方ほう。こゝで一杯いっぱい機嫌きげんになつた所で、友達ともたちに吉原よしはら行きを勧められると、「されば」今の言ことで云へば「さうだなア」と云ふ位くらいは心が動く。その動くのを、稻荷いなりの縁えんで、「化まじかされる」と云つたのである。

長嘶ながはな蜻蛉とんぼのとまる錠やうりの先さき

武士ぶしが人ひとを訪おとづれていつまでも嘶はなをする。大變たいへん長ながくなつたので、供槍ともやりもち持もが門前もんぜんに立たて、置おいた槍やりも長ながく動うごかぬので、その先さきへ蜻蛉とんぼがとまつた。秋あきの屋敷前やしきまへの一景いけいである。

「百一つ」めつたに無い、百に一つ位しか無い事。

ぬか味噌みそにもしかも瓜うりの百一つ

糠味ぬかみ噌その中なかにはいろ／＼なものがつツ込んである。ぬか味噌みそに手てを突つ込んで探さがす時とき、ひよつと瓜うりは無ないかと思おもふが、なか／＼出でぬ。たまさかに出でて來ると云ふこと。瓜うりがぬか味噌みそから出でて來るもの、中なかの優秀いっしゆうな物ものなのである。

舟嫌ふなきらひ一人ひとりは川かはのへりを行ゆき

皆みなが舟ふねで行ゆくに、舟ふねに乗のると直すぐ醉よふ人ひとがある。其人そのひとは一人ひとり川岸かはぎしを傳つたつて行く、と云ふをかしい光景くわうけい。

太夫職百で四文も暗からず

昔、九十六文を百文とすることがあつた。太夫、金のことなど知りんせんと云つた顔をしてゐるが、なか／＼金で苦をしてゐるので、百で四文とくが行くと云ふこともチャンと心得て居る。

佐野の馬さて首を垂れへをすかし

川柳で、「佐野の馬」と云ふのは、能樂「鉢の木」で有名な佐野源左衛門常世が、鎌倉へ駈附ける時の瘦せ馬のことである。飽くまで不景氣な彼の馬の愈出發と云ふ時の様子を云つたのである。

浪一つあだには打たぬ玉津島

「和歌の浦に鹽滿ち來れば瀉を無み葦邊をさして田鶴鳴きわたる」と云ふ赤人の詠の「瀉を無み」は、干瀉が無いから、と云ふ意であるのを、後人が間違へて「片男波」と云ふ特別の波にしてしまつた。玉津島では、波一つもたゞの打ちやうはない。「かたをなみ」と云ふ打ち方をする」と云つたの。

こま犬の貌を見合はぬ十五日

六月十五日、隔年に行はれる山王祭、即ち永田馬場の山王社の祭は江戸第一の大祭である。この日は非常の人数で、こま犬が向ひ合ひながら、間を通る人の爲に、顔が

互に見えぬ。

辨天の前では波も手を合はせ

江ノ島の辨天であらう。波が相打つて音高く、立つところを、合掌拍手すると見立てたのであらう。

遣唐使ふき出しさらな勅を受け

人口に膾炙してゐる名句である。唐帝勅してのたまはく「モツキン、ソコロコミコテコ、サイコウロウ、ツクネツトウ、ミコテコモウ、ミコテコ、オガリコ、チウタコモウ、キリミリン、ムケンソウ、サツキリボウチヨウ、デモン、スベン、カラン、ドン、クンリユンスンドン、オ

「舟宿」當時、柳橋の沿岸、山谷堀の入口等に軒を並べ吉原の客の送迎をし、又さならずとも花見雪見等の遊船の世話もしたるもの。

「家内喜多留」柳樽は柄の附きたる樽にて朱塗りなどにして酒を人に贈る時に用ふ。もとは柳の木にて作り

舟宿へ内の律義をぬいて行き

内から着て来た律義な着物は舟宿へ脱ぎ棄て、こゝで粹ななりに着かへて、吉原へ押寄せる所

家内喜多留小さき戀は蹴散らかし

甲某、乙某などが言ひ寄つたこともあつたが、今度目出度く丙氏へ嫁に行くことになつて、甲や乙やそんな小

たる故この稱あるなり。婚禮の結納の時これを贈る目録に家内喜多留と記す。今も目録に記すだけはこれを記す。

「あくた川」淀川の下流へ、攝津より流れ注ぐ小川。業平が二條の后をそよのかして墮落したる時滲りし川。伊勢物語に曰く「昔男ありけり。女のおふまじかりけるを、年を経てよばひ渡りけるを、からうじて女心あはせてぬすみ出で、いと暗きに來けり。あくた川といふ川をぬていきけれ

さな戀を蹴散らかして、願みず婚すると云ふ所「小さい戀」蹴散らかし」よくその心持が出てゐるでは無いか。

やわくと重みのかゝる芥川

二條后を連れて芥川をわたつたと云ふからは、業平が必ずおんぶしたに違ないと云ふ想像で、よく繪に王朝時代の後半長右衛門と云つた姿が描いてある。川柳ではたゞ「あくた川」と云つてこの事件を寫してゐる。「やわやわと重みのかゝる」とは面白く二條后の重みを云つたものである。

ば、草の上におきたりける露を、かれは何ぞとなむ男に問ひけるを、行くさき多く夜も更けにければ、鬼ある所とも知らで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなるくらに、女をば奥におし入れて、男はうやなぐひを負ひて戸口に居り。はな夜も明けなむと思ひつゝ居たりけるに、鬼はや女をば一口にくひてけり。あなやといひけれど、神の鳴るさわざに得聞かざりけり。やうく夜も明け行くに見れば率て來し女も無し

足すりをして泣けども
かひなし。

しら玉か何ぞと人の間
ひし時露と答へて消な
ましものを

これは二條のきさき
の、いとこの女御の御
許に仕うまつるやうに
て居給へけるを、かた
ちのいとめでたくおほ
しければ、盗みて負ひ
て出でたりけるを、御
せうと堀河のおとど、
太郎國經の大納言、ま
だ下藤にて内へ参り給
ふに、いみじう泣く人
あるを聞きつけて、と
どめて、取返し給うて
けり。それを斯く鬼と
はいふなりけり。まだ

いと若うてたゞにおほ
しける時とや。

「七つ」今の午前四時
と午後四時とを云ふ。
この句のは午後。

風鈴ふうりんのせはしないのを乳母うははと知り

見ては居ゐない。音おとだけ聞いてゐる。風鈴ふうりんが時々リン、
リンと鳴なるを聞きいてる。そのうちリ、リ、リン、リ、
、リンとせはしなく鳴なる。あれは風かぜで鳴なるのぢや無い
乳母うははが手てで風鈴ふうりんを鳴ならして、子こをあやして居ゐるのだ、と
わかる所ところ。日常生活にちじやうせいかつの一環ひとわたり事を寫うつして、その心持こころもちがよ
く出でてゐる。面白おもしろい句。

鳥とりさしがかつぐと七ななつ過すぎになり

鳥とりさしが、あちこちの木きをねらつて鳥とりをさして居ゐたが
やがて止やめて竿さきをひつかつた。それは丁度ちやうど午後四時過す
頃ころ。

あいさつを内義は櫛で二つかき

いきな内義らしい。出入の者が挨拶をする。それに答へて一寸首を動かす拍子に、櫛で頭を二つ搔いたと云ふ所。お辭儀を正しくせず、頭をかいたのか答禮したのか解らぬやうな舉動。そこが鷹揚で、碎けてゐて宜い様子である。

「にぢ」詰問しに。

女房は酔はせた人をにぢに行き

かたくな、女房である。亭主が酔つて散々な事をして歸つて来た。女房、一體誰がこんなに酔はせたかと、其人を聞正して、そこへ小言いひに行く所。

傘借りに沙汰の限りの人が来る

夕立だ。傘を貸して呉れと云つて来た人を見ると、どうも言語道斷沙汰のかぎりの人である。金を三度も借りて、もう三年たつて、一文もかへさず、一度も顔も見せない奴だ。

むかうが鬨が高いけれども、どうも此邊に傘借りる家は無し、思切つて来たのであらう。

本降になつて出て行く雨やどり

夕立の雨やどり。直き晴れると思つて、待つてもく晴れぬ。だんく、落着いて、普通の雨になつて来た。これぢや、いつ迄待つても駄目だと、あきらめて出て行く

所ところ

張肱はりひぢをしてもやうく能い女郎衆ぢやうぢゆうしゆう

女郎ぢやうぢゆうは張肱はりひぢをして、形かたちをつくるもの、この女郎ぢやうぢゆうは、張肱はりひぢをして、まアそれでやツと少し見られる位の女郎ぢやうぢゆうだと云ふので、「やうく」は漸やうやくの意い。

切落きりおとし氣きの毒どくさらな乳ちを飲のませ

身動みうごきもならぬやうに詰つめ込まれて居ゐるなかで、子供こどもに乳ちをのませる母親ははおやがある。いかにも親おやも子こも窮屈きうくつさうで飲のみにくさうで、見みてゐると如何いかにも氣きの毒どくに見みえる。

「切落」芝居の今の平土間の前の方。こゝはシキリなく皆追込みなり。

地紙賣母ぢがみうりははに逢あふのも垣根越かきねこし

地紙賣ぢがみうりは多くかけま上あがりだと前に云いつたが、又放蕩息またほうたうしつ子の勘當かんだうを受けたのも、商あきなひの中で最もつともいきなこの地紙賣ぢがみうりになつたのもある、この句くのはそれで、父ちちにあへぬのは當然たうぜんであるが、母ははにあふさへ、垣根かきねを隔へだて、話はなしをするだけ。一寸ちよつとあはれな所ところ。

舞留まひとめを常つねにくゆらす草履取ざうりとり

銘めいに舞まひの字じのあるのは上等じやうとうの煙草たばこであつた。これもさうであらう。煙草たばこは主人しゆじんから貰もらつてるから、常つねに上等じやうとうのをくゆらすのか。又または、他たに贅澤ぜいたくのしどころが無いから、煙草たばこだけおごつてるのかである。

姑しうとめのつむじは尼あまになつて知れ

意地悪いぢわるのつむじは曲まがつてると云いはれてゐる。この姑しうとめ餘程よほごの意地悪いぢわるであるが、そのつむじがどんな風ふうになつてゐるか、薙ひ髪はつしてから、實じつに明白めいはくに曲まがり工合ぐあひを露呈ろていしたと云いふ所ところ。

駈落かけおちも器用きようにすれば惜なしがられ

どんな風ふうにするのか云いひにくいが、何かそこにあはれけな所ところを匂におはせてすると、その一寸ちよつとのところところで皆みなに爪弾つまはじきされず、却かへつて惜なしがられる。

懐中くわいちゆうの杓子しやくしを出だしていたゞかせ

あたつたので、やア杓子しやくしの靈驗れいげん有難ありがたしと、懐くわいちゆうからそれを取とり出だす。かたはらの人等ひとらが、あやからせて下くださいと其それを頂いたゞく所ところ、あたり先生せんせい大得意だいとくいの體てい。

見みに行いつてしめッほく出でる拂藏はらひくら

土藏どざうの賣物うりものがあるので、見みに行いつた。中なかをよく見みて出でて來くる。土藏どざうと云いふものが一體外氣たいぐわいが通つうじないで濕しめつほいもの、それに拂藏はらひくらとあるから、もう暫しばらくく人ひとの出入でいりしなかつたのだ。それで濕氣しつぎをウンと着物きものなどに含かくんで出でて來くる有様ありさま。氣持きもち悪わるけな様子やうす。

煤拂すすはきの顔かほを洗あらへば知しつた人ひと

あたるまじなひに、杓子しやくしを懐中くわいちゆうして富とみの場ばへ行くことありたり。

「拂藏」賣物うりものになつて土藏どざう。

机上の句だなア。煤で眞黒で今まで誰だかわからなかつたが、顔を洗つたら、知つてる人だつたと云ふ句、

火貫ひの吹きく人突當り

火種が盡きたので、お隣へ火を貰ひに行き、一つの火種のおこり炭をはさんで歸る、その途中消えさうになるので、大事に吹きく來ると、向うを見ないで歩くので人に突當つた所。

○旅戻り子をさし上げて隣まで

名句である。旅行から歸つて來た。子が父珍しさに願寄る。よう大きくなつたな、どの位重くなつたと、其の子

をさし上げて、隣まで歩いて見たと云ふ元氣のよい、人なつツこい様。

佐野の馬甘露のやうな豆を食ひ

鎌倉へ行つて、辭令を貰つての歸り、久しぶりに、どうもちぎれる程うまい豆を食つた所。

椰の葉を芝居の留守に掃出され

朝早くから起きて、大らんりきに化粧をしちらして芝居へ出かけて行つた。家は大風の吹いたあとのやうな光景。そのなかに鏡の裏から椰の葉が落つこちて居た。留守の人が掃除する時に、たゞの枯葉と思つて掃出した。

「椰の葉」椰の葉特に伊豆大権現の椰の葉を鏡の裏へ入れて守りとする事ありたり。

それを女が歸つて、小言いふ。その女になつて云つた句。

「仕事師」労働者。

仕事師の飯は小言を菜にして

「なんでエ、この揚は、ともし油の匂ひがするぜ。鍋島様の猫ちやあるめいし、おれにやア動く耳が無えんだぜベツく、畜生、茄子漬の中に砂がへえッてたぜ。茄子を逆に讀んだ洒落でもあるめえ、お千代、齒にあたらねえ洒落にして貰えてえ」その揚と茄子もほんの少し、この小言いひくで、思はず食もすゝむから妙さ。

「ゆるがしい」ゆるがせにする風。緩漫。

催促も質屋のするはゆるがしい

早く受出しなと、又流しなと、どちらでも宜いと云ふ

所があるので、ゆるがせに催促するだけ。その質屋獨特の催促の仕方を寫した。

猿田彦いづばし神の氣で歩き

祭列の猿田彦が、大神を杖について、威張つて歩く所を、あれでいづばし神様になつた積りで歩いてる、と笑つたのである。輕妙。

御詠歌に預りもの、娘あり

四國遍路か、又はその他地方をまはる巡禮か、御詠歌を門毎に唱へて歩く巡禮の、その中に、ちよいとした娘がある。よく巡禮に行く人に、何か所願のある家から私

のうちの娘も連れて行つて下さいと、頼む事がある。さう云ふよその娘を預つて歩くことがある。預りものゝと故、成るべくつらい目をさせず、なりにも氣を付け、立てゝ行くので、目立つのである。

蓮根はこゝらを折れと生れ付き

鶏を寫して「何か云ひたい足づかひ」と云ふと共に、又かやうに、植物の川柳的觀察がある。蓮根はところ／＼に縊れがある。それを、この邊から折れ、と云ふやうに生れつき出來てる、と笑つたのである。

切見世はたんこぶまでを疑はれ

切見世は、病氣が怖い。客は警戒の目つきで女を見る。女の體に一寸した瘤があるのを発見しても、若しや悪い病では無いかと、おいこれア如何したのだ等と詰問される。

母親はもつたないがだましよ

放蕩息子の所感である。父親はなかくむづかしいが母親の方はだましよと言ふので。この「もつたないが」と云ふ所に、尊敬の心が出てはる。この「出てはる」と云ふ調子が、よく斯種の息子を現はして居る。

けんべきを打ちく戻る藏の鍵

「けんべき」痲癖。普

て、極めて下等なる娼家。間口六尺奥行九尺程の家。「たんこぶ」たゞ瘤と云ふに同じ。

通肩の凝りに云ふ。

藏へ這入つて長い間探し物をした。それで肩を凝らし
て、出て来る時、藏の大きな鍵で、肩を打ちながら来る
所を寫す。

「念頃ぶり」親しみを
あらはすこと。

湯屋へ来て念頃ぶりは側へ脱ぎ

湯屋で、知つた人に會つた。いろく立話をして、
着物を脱ぐ時に、其人の脱いだそばへ脱ぐ。着物のそば
へ、こちらの着物を脱ぐと云ふことで、親しみを現はす
と云ふ其事を抽出して考へると、をかした事、それを笑
つた。

餅はつくこれから嘘をつくばかり

嘘をつくは債鬼にである。餅をつき終つた。これから掛
取に嘘をつけば、それで年は明けると云ふのである。下
等な洒落を命とした句で、初代川柳も時にこんなのを選
んでるのを怪しむ。

色男四角な智恵で奥へ呼び

「まんぢうになるは作者も知らぬ智恵」で云つた江島生
島の事件である。色男は生島である。四角な智恵は蒸籠
に入れて呼ぶを、蒸籠は四角なものだから、斯う云ひま
はしたのである。

「十三日」十二月十三

腹立てばやぼらしくなる十三日

日は煤掃の日なり。

煤掃の日には、上は大奥でも、下は町屋に至るまで、よく人を胴揚げにしたもので、その胴揚される者は平生憎まれてる人である。しかし戯れにする胴揚げで、憎いからいぢめると云ふ意味で無いからかひの胴揚げもあつたに違ない。

この日に胴揚げされて、腹を立てゝは野暮らしくなると云ふのである。

「出女」宿場の旅籠にかゝへられぬる女。客足をひく爲に店先に出で居り、夕暮は旅人を腕力にて引張り込み、いろ／＼の用をつとめ夜の伽をもなす。

出女の鏡へうつる馬のつら

名所圖會の挿畫に、よく旅籠の店さきの廣い板敷に女が通行人に肌見よがしにもろ肌ぬぎで、化粧してゐる所が書いてある。それが出女である。

風俗文選に、木導の「出女ノ説」と云ふ名文がある。

その中に「やう／＼晝の日ざしはれやかに輝く比、見世の正面に座をしめ、泊り作らむとともろ肌ぬぎの大けはひ、首筋のあたりより燕の舞ひありく景氣こそ、目さむる心地はせらるれ。」とあるは、丁度その川柳の畫いた所の光景である。

この句まつ佳作の方であらうが、どうも不自然な所があると思ふ。出女は、往來へ向つて化粧する。それが光線の都合も宜いのである。ところが、その鏡に、鏡のむかうを通る馬が映るわけは無い。どうかして鏡を往來の方へ向けた場合か、又は合せ鏡をした場合にしか、馬のつらはうつらぬ筈である。斯う思ふと、一誦して面白い

と思つたこの句が、なんだか作り物のやうになつて、興味が薄らぐ。

針ほどを棒とは母の二番ばえ

母の二番生えとは、二度目に出來た母で、後妻で、子から云へば繼母である。母の二番ばえは、針ほどの繼子の過失を、棒ほどに云ふと云ふので、植物の二番ばえのそだち方に縁をかけて云つたのである。

あたらしくしてもやつぱり親仁橋

元吉原の一二町西の方、汐入の所があつて路が悪かつたので、庄司甚右衛門が世話を焼いて、排水をし、そこ

に橋をかけた。甚右衛門は「親仁く」と云はれて居たから、親仁の架けた橋だから、「親仁橋」と云ふ名の橋になつた。その橋を新に架けかへても、むすこ橋とか何とか云ふで無く、やつぱり古びのある親仁橋の名をつぐ、と云ふ、つまらぬ句。

戻る猪牙達磨もあれば寢釋迦あり

吉原戻りの猪牙舟の中、川風の寒さに、頭から物を引つかむつて、達磨のやうに坐つてるのもあれば、昨夜の疲れで横になつて寝てるものもある。それを寢釋迦と云ふ語で云つて、達磨とともに、佛味を猪牙中に盛つたのである。

料理人客になる日は口が過ぎ

料理人が、どこかへ招待されて、お客様になつて、馳走にあふ時に、つい「どうもこれは結構、これでも少し鹽氣があると、宜しい。」などと、馳走の批評を突込んでやるのを、「口が過ぎ」と云つたのである。面白い句である。

請狀が濟むと買ひたいものばかり

請狀の文句で見ると、給金のうちいくらか前借が出来る事になつてたと見える。それで奉公人が、請狀が濟むと共に、まとまつた金を手にするので、俄にあれも買ひたくこれも買ひたくなる。

人に相立貴殿方へ何々奉公に差出候處實正也然る上は御給金一ヶ年何兩何分と相定め爲御取換金何兩隨に受取申候云々而して請人は手數料として一分取りたり。

法の聲請狀までに行届き

請狀には、時に寺請と云つて、寺で、この者は耶穌教で無い、佛教徒であると云ふ事を保證する證書が必要であつた。この句の「法の聲」は佛敎の響とでも云ふ程のこと、今の佛敎は、請狀までの世話をして、よく行届いたことだと、賞めたやうで、そのあまり手が俗に出過ぎる所をけなす語氣を含んでゐる。

「論語よみ」學者。

大屋をば尻にはさみし論語よみ

論語よみだけは、大屋の權威を認めない。「尻にはさみし」と云ふのは輕んずること。

大名は一年置に角をもぎ

徳川時代に、大名が一年代りに江戸屋敷に詰めることになつてた。所謂參勤交代である。もつともその江戸に在る期間等は格によつて差があつた。そして大名の妻子は江戸に置かねばならぬ事になつてた。それで大名は國もとに妾を置いた。大名江戸に在る間は、國もとで妾が角を生やして居る。大名國許に在る間は、江戸で夫人が角を生やして居る。その角を丁度一年おきにもぐことになるのである。

生り初めの柿は木にあるうち配り

初めて生つた柿は、早く賞味して貰はうと、落ちないうちに、知人に配る。

藪入の二日は顔を餘所に置き

三日の間の藪入のうち、二日間ぐらゐるは、親族知人等の家をまはる。うちに居るは一日ぐらゐるである。

歌がるたにも美しい意地が有り

歌がるたは品のよい女たちのするもの。それにも、勝

負について意地張る所がある。歌がるたの意地、女の意地だから、美しい意地と云つたので、一向力の無い詰らぬ句。

七で盛るものとは見えぬ薬種船

薬を船に積んで行く所を見ると、大變な分量で、あれが少しつゝ七ですくつて盛るものとは思へぬ、もつとドシゝ、費消するものゝやうに思へる。

初がつを家内残らず見たばかり

初鰯は高價なものであつた。少し買ったが、主人の食ふだけあつただけで、家族は皆一目見ただけ。つまらぬ

「初がつを」鰯は鎌倉小田原邊より釣つて江戸におくる。その早く出るを初鰯と云ふ。最

早きは花の頃、一般に賞玩さるゝは初夏。

句。

辨天をのけるとあとはかたはなり

七福神のつち、辨天をのけると、耳朶の馬鹿に膨れ上つたのや、虱の長いや、不具者ばかりであると、神様を罵つた句。併し毘沙門壽老人の如きはどこがかたはと認められるであらうか。

畠から洗足ほどの日を餘し

百姓が畠で稼いでゐる。日のある間稼いでゐるのである。暗くなつてから歸ると、足を洗ふのに不都合だからその時間だけを見積つて、丁度洗足が濟んでから日の暮

れるやうに、島を出ると云ふのである。實地の句で、面白く句である。

律義者まじりくと子が出来る

「律義者の子澤山」と云ふ諺は有名であるが、この句はその結果だけを云つたので無く、出来工合を云つて餘蘊無しである。律義者のまじめな顔と、子がよく出来ると云ふ事と對照して、皮肉なをかしみがある。「まじりく」との語を何と云つて可いか、私は説明の仕方を知らぬ。ぐずくとしてゐるやうで、ぐずくと子が出来て殖えて行く有様である。この「まじりく」は實に用ひ得て妙である。

叱られた禿筆筒へ寄りかゝり

禿が叱られて、部屋の隅へくへ行つて、筆筒に寄りかゝつて立つて居る。おツと其の筆筒はカラだから、そつと寄りかゝらぬといけない。

針明の坐つた形りに灯がとぼり

針明が坐つたその儘に、日が暮れて、その前に人が行燈を持つて來た。その儘日光から燈光にかけて仕事を續けてゐる所。忙しい所で、そして靜な味である。

「針明」針仕事をしに雇はるゝ女。良家の針明といひ、吉原のな お針と云へり。針明は針妙と書く

百姓は金でせかせるもので無し

なんでも金さへ出せば、仕事を早くして呉れるが、百

姓だけは、自然によつて仕事をするもの。いくら金をやつても、夏米の收穫は出来ぬ。

神樂堂逃げた翌は母が出る

神樂堂の美しい巫女が、参詣人と出来て駈落した。その翌日は、直ぐに代りは出来ぬので、補充に昨日までの巫女の母親が舞ふと云ふので、参詣人は意外に婆の舞を見せられて失望する所。

「神樂堂」川柳に神樂堂とのみ云ふは、美しき神樂巫女の舞ふ事を云へり。江戸の神社にて美しき巫女に艶なる装をさせて舞はせ、それにて参詣人を引きし事流行せり。南畝の街談録に、明和六年三月四日より湯島天神社にて泉州石津大社えびすの開帳の折神樂堂にておなみおほつと云ふ美女に舞をさせしが艶美なる神樂巫女にて人を

寄せし嚙矢のやうに記したれど、この柳樽初篇はそれより前なれば六年のこの折を始めとは定め難し。ともかくおなみおほつが振袖の上に千早を着て艶に舞ひし後愈甚しくなり橋町の踊り子の中より女を選びてたゞ踊子の儘のなりに千早だけ着たる巫女が舞ふやうになり、この神樂巫女を相手にしているく色の事件も出来したり。

藪入の何にすねたか六阿彌陀

藪入には、陽氣な遊びをするが普通であるのに、六阿

彌陀まはりをする奴は、何かにすねてのとだらう。失戀か、或は其他の失意の爲にか。

關守の聲を越えると真似て行き

「聲を」で切つてよむべし。關所では恐れ謹んで居たが關所を越すと、「通れ」などと、關守の聲の聲色を使つて行く。

墓桶を下げて見とれるかくし町

「かくし町」とは、通りから見えぬやうな所に、下等な遊所の並んだ所でもあらうか。それは寺のあたりなどにあつたものであらうか。墓參りの供の者が、墓の水桶を

下けながら、そこに女のちらくするに見とれると云ふ所か。

腰帶は見越の松に逃げ残り

娘が男にそののかされて逃げたあとの光景である。よく草双紙などにあるやうに、見越の松に攀ち、そこから腰帶を下けて、それを傳つて出たので、あとに腰帶だけ其儘にぶらくと残つてゐる。それを帶だけ逃げないで残つてると云つたのである。

「腰帶」しごき。
「見越の松」塀の外より見ゆるやうに植ゑたる松。

「松ヶ岡」相州鎌倉郡、圓覺寺の南の、通路を隔てたる地を松ヶ岡と

松ヶ岡ちつとはじくが納所分

こゝの「はじく」は算盤を弾くこと。納所は寺務を執

云ふ。そこに東慶寺と云ふ臨濟宗の尼寺あり川柳にて松ヶ岡と云ふは、この寺のことなり北條時宗の室覺山尼が開山なり。ここに開山よりの寺法あり曰く、凡て婦人一旦不法の夫に配し容易く休難き故ありて、冤屈に堪へず躬づから身を過つ者あり、其類奔りて當寺に入る時は、三ヶ年の際抱置、其身の望を果さしむ。この寺法確守せられて、近く維新まで縁切の特權を維持し俗に縁切寺と云へり。

る僧のことで。松ヶ岡へ駈込む女のうち、少し算盤のいけるのは、納所の格になつて、寺務の方へまはる。

病犬ちつと追つてはたんと逃げ

病犬はヤマイヌと云ふが、この當時ヤマイヌとも云つたと見えて、原書に「病イ犬」と書いてある。食ひつく犬である。強がつて少し追つて見れば、大急ぎで遠く逃げる。強がり、いたづら好きの誰もが然うする。

事納氣をつけられるあら世帯

事納は、一寸知らずに過ぎて了ひさうな行事日である新世帯持ちが、つい知らないで居るのを、隣の世話好のおかみさんが、「今日は事納ですよ。箆を御出しなさいよ。」と注意して呉れた所「氣をつけて箆を出させる新世帯」と云ふ句と同じ意の句である。

「事納」二月八日を事始と云ひ十二月八日を事納と云ひ、兩日目底を竹竿の先につけて出す俗あり。今も東京にてこの風をなす者ありその由来に就き種々説あれど未だ要を得ず。

祭まつりから戻もどると連れつれた子こを配くまり

近所きんじよの子供こどもを二三人にんづ連れて、祭まつりを見みに行いつた。戻もどると甲かの子こは甲かの家いへへ送おくり、乙おつの子こは乙おつの家いへへ送おくりむと云いふ所ところ。それを配達はいたつすると見たみたのが面白おもしろい。

間男まをとこを見出みだして耻はぢを大おほきくし

間男まをとこをされると云いふ耻はぢを、見出みだして表沙汰おもてぎたなどにして愈いよく大おほきくする。

姦通かんつうと云いふ罪惡ざいごくは、今いまよりは徳川時代とくがわじだいには遙はるかに多おほかつたやうに思おもはれる。

團扇うちはでは憎にくらしい程ほどたゞかれず

叩たたかれるのは男おとこか女メナか知らぬ。併しかしまづ若わかい男おとこであらう。叩たたく方は確たしかに若わかい女メナ。團扇うちはを手たまさぐつて涼すずんで居ゐる時とき、何か冷ひやかされて、「エ、憎にくらしい」と、持もつてた團扇うちはで叩たたいたが、ボソツといつただけ、さきは痛いたくも何なんとも無い。理窟りくつつほいやうで然しからず、女メナの行かうごう動お及び其その心持こころもちがよく出でてゐる。

髮結かみゆひが替かつてかはる頭形あたまなり

髮結かみゆひさんがかはつたら、頭あたまの恰好かつかうが變かはつたと云いふだけの事こと。面白おもしろきは、髮結かみゆひの爲ために、頭あたまそのものゝ形かたちが變へん化くわしたやうに見える所ところ。

寒念佛ざらの手からも心ざし

「ざらの手」は、ざら／＼の手と云ふことであらう。寒い時で下男下女の手はざら／＼に荒れてゐる。さう云ふ手からも、志の奉捨を受ける。

檢校の供は旦那が片荷づり

「片荷づり」とは、天秤の兩方に荷が無く、片方だけに荷をつけて、それをかついで行く事を云ふのであらう。檢校の供は、いつも旦那の手引をして行かねばならぬので、旦那が荷になる。片荷づりになると云つたのであらう。

「檢校」盲人の官。徳川時代には千兩獻金すれば檢校にしたり。

嫁の部屋這入ると漆くさいなり

嫁の部屋には、新しい塗筆筒、新しい衣桁、新しい鏡臺など、漆塗の新しいものがあるので、這入ると漆くさいのである、それア香料の匂ひも、白粉の匂もせうが、その匂のするを寫した所が、それは平凡で、あたりまへの感しか起らぬ。この「漆くさい」所を捕へたので、嫁の部屋の印象が強く刻せられる。

丸山へはまつて髭で蠅を追ひ

丸山へすつかり打込んだ唐人、あまり過度の結果、あごで蠅を追ふやうになつた。所謂「あご蠅」と云ふ病體になつた。それが唐人だから、あごに髭がある。だから

「蠅を追ひ」色を好み過ぎて衰へる様を、あごで蠅を追ふと云ひ習はせり。手を動かす氣力も無くなれるを云ふなり。

髭で蠅を追ふと云ふ所が可笑味。

折節は小粒もあたる遣手の齒

昔は祝儀の金を、肴に交せて、箸にはさんで、與へたことがある。時々遣手の口で、小粒をはさみ込まれてカチと嬉しい齒ざはり。にこく笑ひの悦に入るとがある。

「小謠」謠の一節をうたふを云ふ。

小謠で来る浪人は元手なし

浪人には謠の門附をして暮らしたのもあつた。小謠うたつて遣つて来る浪人は、あれはなんの資本も無く、口だけで商ひをしてると。

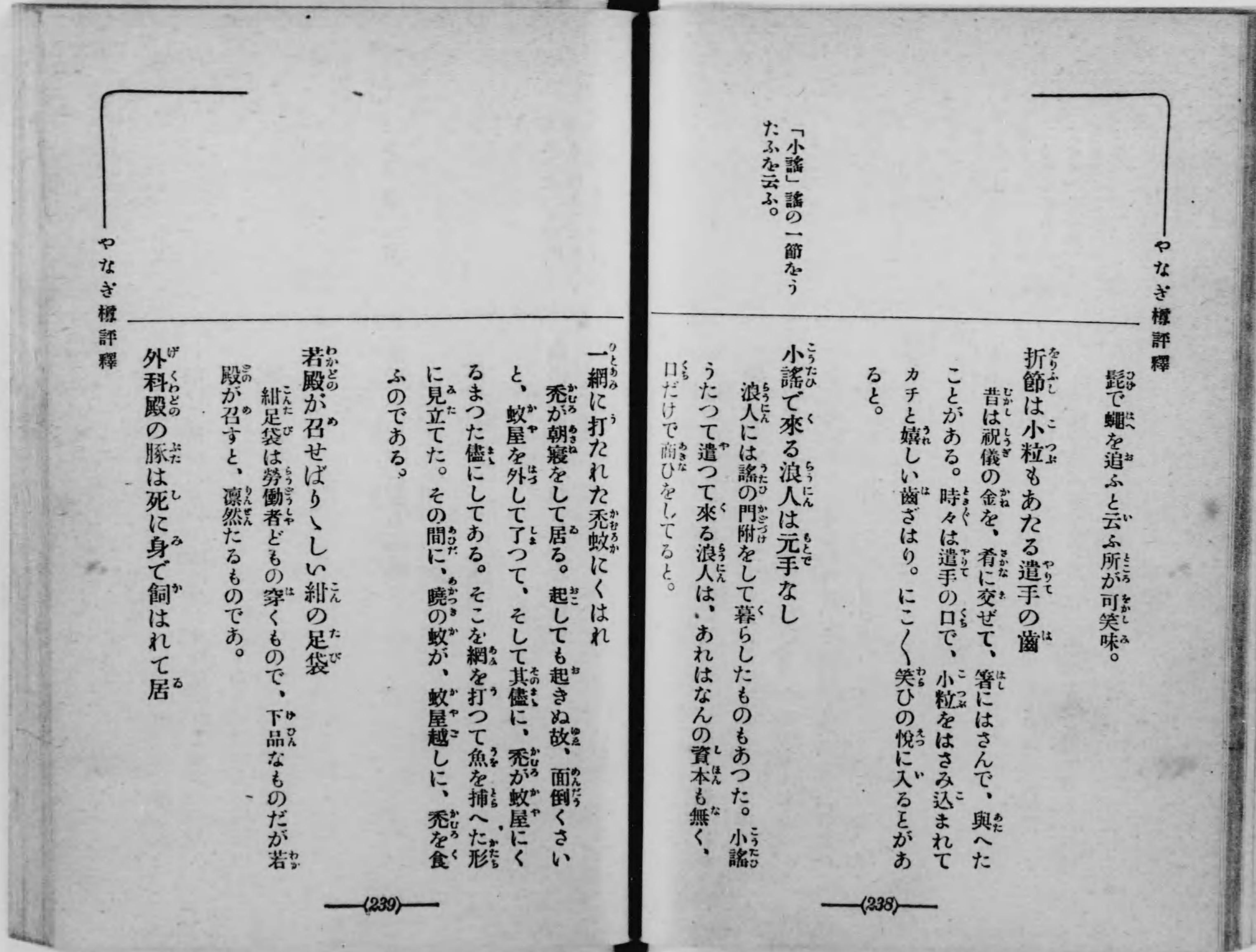
一網に打たれた禿蚊にくはれ

禿が朝寢をして居る。起しても起きぬ故、面倒くさいと、蚊屋を外して了つて、そして其儘に、禿が蚊屋にくるまつた儘にしてある。そこを網を打つて魚を捕へた形に見立てた。その間に、曉の蚊が、蚊屋越しに、禿を食ふのである。

若殿が召せばりしい紺の足袋

紺足袋は労働者どもの穿くもので、下品なものだが若殿が召すと、凛然たるものである。

外科殿の豚は死に身で飼はれて居



外科醫者は豚を飼つて置いて、重い疵には、豚の肉を削いで補つたもの。豚は生き身を削がれてもさして苦みもせず、ぢきに疵が癒えるからである。だから外科醫の所に飼はれてゐる豚は、死身になつて、即ち肉體をさへけてゐる。

「談講」談の集會。

前髪へ白髪之交る談講

前髪のある少年も白髪頭の老人も打交つてやるは、談講の特色である。

血の道もてんねき見える長局

長局には、男と云ふものを知らぬ女のみが居る筈であ

「血の道」子宮病。
「てんねき」たま／＼
「長局」大奥の女中の

居る所、女中の各部屋即ち局が長く連り居る故云ふ。

「車座」多人數圓形を作り、中を圍みて座すること。

「六夜待」二十六夜待のこと。七月二十六日月の出る時三尊佛の形を現すとて、高輪邊賑へり、今も東京の高臺この夜賑ふ。

るのに、たまには、血の道を病むのもあるのは、どういふものであらう。

車座へ紺の手の出る六夜待

二十六夜の月の出るまで、車座になつて飲んでるその仲間に、紺屋が交つて居て、紺に染まつた手を出すと云ふので。

類句に「六夜待百染程な手を合はせ」月の出をそら色の手で拜むなり」などあるのを見ると、高輪邊に特に紺屋が、この當時多かつたのでは無からうか。

紺屋の職人は愛染明王を十三夜に祭る、とも云ふ、と書いてあるものがあつたが、どうも意に満たぬ。

○ 櫻見さくらみに夫をとは二丁跡ちやうあとから出で

花見はなみに家中うちぢゆう出かけるのだが、夫婦ふうふ一しよに出るは、今いまこそあれ、昔むかしは不體裁ふていさいに思つたもの、だから二丁ちやうほど女房にようぼうなどが行つた頃に、主人しゆじんが家を出る。

病やみ上あがり日本にほんの人ひとになぐさまれ

丸山まるやまの遊女いうぢよである。病氣びやうきあけくには、峻烈しゆんれつな外人ぐわいじんの相あひ手てにはなれぬので、當分たうぶん日本にほんの客きゃくを取る。

燈籠とうらうの人ひとを禿かむろはむぐつて出で

吉原よしはらの燈籠とうらうの人ひと出いで、大雜沓おほざつたふの中なかを、人ひとの袖そでの下したをくぐつて、禿かむろがさきへ出いでて行く所ところを、水みづをもぐるやうに、人ひと

「むぐつて」もぐつて

「三日」新年の。

をもぐると見立てた。

子こを持もつてから三日さんじちをやつと塗ぬり

子この無ないうちは、毎日まいにちのやうに化粧けしやうもしたが、子こを持もつてからは、一年ねんのうち、やつとの事ことで正月しやうげつの三ヶ日かに白粉おしろいをぬるばかり。始はじめて子こを持もつた奥さん達おくさんたちの身みにつまされる句。

居酒屋いざみやに馬うまと車くるまの拂はらひもの

居酒屋いざみやは馬士うまごの寄合よりあふ所ところだから、馬うまや荷車にぐるまの不用ふようのがある、居酒屋いざみやの前まへへ置おいたもの。

寒念佛ころぶを見れば女なり

衣着て寒念佛に歩いてる所を見ると男か女かわからぬが氷に迂るかして、轉んだのがある。すると腰巻などが見えて、尼さんと知れた。

母親の或はおどし手を合はせ

どら息子を母親が吐りつけて、勘當して貰ふよ等と云つたり、又どうぞこの母が頼むから止めて呉れよと、手を合はせて、下手に出て頼んで見たり、いろ／＼に心配する母の慈悲。

鼻聲で湯治の供を願ひ出し

妾が旦那に、甘つたれた聲で願ふ、と云ふやうに一寸取れるが、これは、そんな香氣な鼻聲で無く、そもくその鼻があやしくなりさうな病にかゝつてる出入の者か内の番頭か、今度旦那が湯治に行かれると聞いて、どうか、御供を願ひたいもので、と頼むので、その頼む聲が、もう大分あやしくなつてる所。

出格子へ子をさし上げて名を呼ばせ

これは色めいたのでは無く、たゞ、近所の家でよくやる戯れである。近所の知つた家の前へ、子を抱いて守りしつゝ行つた。その出格子の所へ、子供をさし上げてつかまらせ、孝ちやんと云つて御らんなど、その家の

「出格子」出張つて居る格子窓。

人を戯れに呼ばせる所

女房を雪に埋めて炭を賣り

越後などの雪國から、炭賣が出て来る。俳句で云ふ「炭賣のおのが妻こそ黒からめ」と云ふ奴である。女房は國で雪の中に埋まつて居る、その雪と炭との對照に味をもたせ、「雪に埋めて」と云ふ云ひ方で面白くして居る。もつとも大して面白い句では無い。

〇先生と呼んで灰吸捨てさせる

有名な句である。成程突込んで寫してゐる。一寸學問のある、そして貧乏で、人の内に食客になつて居る人。口

では敬つて「先生」と云つて、下男にさせるやうな、灰吹捨ての用をも云ひ付ける。「ハイ」と重みのある返事をして、のそ／＼と座敷へ這入つて来て、一杯になつた灰吹を持つて、のそ／＼と去る。あとへブンと悪ぐさい汗の香が残る。さう云ふ人物があり／＼と句のおもてに動いてゐる。

はやり風十七屋からひきはじめ

十七屋は旅ばかりするので、寒い時節に入ると、眞先に風邪をひき易い、そこを云つたのであらう。

「十七屋」月に三回上方へ往復する飛脚屋あり。三度飛脚と稱へたり。十七夜の月を立待月といふより、忽ち着きと云ふことの洒落にてこの飛脚の早きを稱へて十七屋と云へり。

根津の客家のひづみに口が過ぎ

根津の客は多く大工であつた。だから、唐紙のたてつけの悪いのを見たり何かすると、「へんどこの盲が建てたのか、こゝの鴨居は七分も下がつてゐるな。」などと、安建築の非難をズケ／＼云つてのける所。

狩人の子はそれ／＼に雀毘

狩人の子は、各、親を見習つて、子供は子供相當に、雀をとる良を作つて遊ぶ。斯う云ふ親の業を見習つて、小規模に子供がやる、と云ふ類の句は種々あるが、どれも理窟の句で、面白くない。

山門を下から拜む氣の古さ

「氣の古さ」とは川柳によく出る、うまい成語で、「古風な心」と云ふ意味である。彼岸には淺草などで、山門に上るを許される。元氣よく山門に上つて、下を睥睨するのは若々しいが、上らずして下から山門を拜むは、老人で、いかにも古風な心である。

初鯉踏込の衆天窓わり

踏込は、遠歩きする時に穿いたもの。息子連の遠足であらう。鎌倉近くで初鯉を、天窓わりで出し合つて食ふ所。

「踏込」裾の狭まつた野袴。

引越の跡から娘猫を抱き

引越の際、道具類を高く積込んだ車が幾臺も行くあとから、娘が大事の猫を抱いて行く所。机上の作であらうけれども、かうした様は或程あるとはあらう。

蠟燭の灯で吸ひ付けて足袋を脱ぎ

宴席が終つて、これから寢ようとする所であらう。火種も無くなつたので、燭臺の蠟燭で一服吸付け、先づ足袋を脱ぐところ。

ちつとづゝ能い手へ渡る御菜が子

御さいの子は、少しの時間、美しい奥女中に抱つこし

「御菜」御幸とも書く
長扇に使役せらるゝ小者。

「はごの子」この頃斯
くいひたり。遣羽子の
羽子のこと。ハネのこ
と。

て貰ふとがある。いつでも長くは抱かれず、いつも少しの時間であるから、「ちつとづゝ」と云つたのである。

新そばに小判を崩す一さかり

新蕎麥食ひに小判もつて這入り、そこで小判を崩して貰ふ。斯うした構はぬ、行當りばつたりの、景氣のよいのも、人の若いうちの一時的の景氣のよさである。

はごの子の命をすくふ左利き

羽子が、もうどうしても落ちさうになつた所を、左手に羽子板を持ちかへて生かしたところ。

女房と相談をして義理を缺き

何百年たつても、夫婦と云ふ關係が存在し、金銭といふものが存在する限り、この句の寫した現象は、いつまでも、續き起るとであらう。「おい、今日川田に聞いたが中山の所で子供が生れたさうだ。初めてのとだから、何か祝つてやらにあならんが、うちの都合はどうだい。」今のところ、十圓ばかり餘てるんですがね。家賃や諸拂ひをしてそれだけ餘るんだけど、丸木（質屋の名）から、こゝ一兩日のうちに利を入れて貰はないと、どうしてもみんな流れるとなると、頻りに云つて來ますから……」
「川ばたの九把の薪の二把残り、シチワ流れる、シチワ流れるか。そいつア大變だ、祝どこちや無い、ちや止ささう

「談義僧」説教する僧

談義僧すわると顔を十ウしかめ

僧が説教を初める時、先づ坐ると直ぐに、ウンとしかみ面をすると、當時の僧の癖を云つたもので、當時ばかりで無く、一種の威嚴を示す爲か、こんなことを今でもする僧があるらしい。「十ウ」とは顔をしかめる様子を現はす語である。ギユツと云ふ程のこと。

居酒屋で念頃ぶりは立つて飲み

居酒屋のなじみ客。腰を掛けるのを、遠慮して、立ちながら飲む。その立つて飲むと云ふところで、厚意を示

してゐる、その可笑味。

薬箱初に持たせてふりかへり

醫者が、はじめて薬箱を供に持たせて回診に歩く時、己が立派さを見たさに、供のついて来る様子をふりかへつて味ふ所。

江戸を出て姿の出来るぬけ参

江戸の町を通つてゐるうちは、いつものなりで飛出したのだから、旅人らしく見えぬが、町を出はづれると、必要上尻を端折つたり、草鞋を買つてはいたりして、旅人の姿が出来る、と抜参りの様子を寫した句。

「ぬけ参り」抜参りにて、父兄、主人の許可を得ずして伊勢参りする事。

「稀人」客。「坊主持」大勢の中に一つの荷物のある場合坊主にあふな交代の時として順々にその荷を代り持つ實用的遊戯。今もすることなり。

花なればこそ稀人の坊主持

一行のうちに、お客様もある。ふだんなら、客に荷を持たせる事などは無禮千萬な事であるが、けふは花見だから、そんなとは構はず、一切平等で、客にも坊主持の規定によつて、荷を持たせる。荷は一行の辨當であらう

色事に紺屋の娘うそをつき

紺屋の娘が色事の約束に嘘をついたのを、紺屋のあさつてと云つて紺屋元來うそつき、それに「色事」と云語の、紺屋に縁あるを興じたので、低級な言葉の洒落。

信濃へは地ひびきがして日が當り

天岩戸隠れの時、手力雄命が岩戸を押し明けて、それをほうり投げ給ふと、その岩戸が、信濃へ落ちて、それが山になつた。即ち戸隠山である。と云ふ傳説がある。それを知つてれば、この句がわかる。岩戸がドシン。地響きがした。同時に、天照大御神現はれ給うたので、日があつたのである。

ぬけた齒に禿のこぞる片ッ隅

齒が抜けて落つこととした、と禿の一人が云つて探してゐる。外の禿が、どこに、わたしを探して上げろ、と三四人も集つて来て、隅ッこで探してゐる所。

「こぞる」大勢寄集る

貰ひ乳にかはる碯の力過

碯打つてる内義に、乳貰ひが来た。どうか又飲ませてやつて下さい、と子をその内義にあづけ、その間、念頃ぶりに、碯を代つて打つてやる。男の力ではあり、又慣れぬので加減がわからず、力を入れ過ぎて打つてる所。

碯敵は憎さも憎しなつかしさ

今もよく噺家がいふ川柳。碯のいつも朴手にする人は敵の気分があつて、憎し、併し同時になつかしい。その心理状態を寫したものの。

若後家のこすいでみんな貸しなくし

「こすい」狡猾。する

い。

若後家のするいのがあつて、氣のありさうな男に、小づかひに困るからとか何とか云つて、少しづゝ金を借りる。彼女に氣のある男は、甲も乙もこの手で、金を貸して、そして返して貰へず、それきりの損になつて了ふ。

黒犬を提灯にする雪の道

雪道で夜である。黒犬を先へ立て、その犬の行く方が道だから、犬について歩いて行く所。黒犬を提灯にするると云ふ云ひ方も低いし、作りつけたやうな句。

迷ひ子が泣けば鐵棒ふつて見せ

夜まはりが、迷ひ子を保護して、「まひ子のノノ三太郎

「鐵棒」鐵の棒の頭に鐵の輪を四つ五つ付けたるもの。夜まはりの

者これを地に突きて鳴らしつゝまはる。

「はゞに」威張つて、横柄に。

「あだついた」べたついた、と云ふに同じ。

やアい」と探しに来るのを待つてる間の事。子が泣くと別に玩具も何も無いから、持つてる鐵棒を振つて、ジャラ／＼と音をさせて、すかして居る所。

産籠のうちで亭主をはゞに呼び

産婦のよりかゝる籠が、産籠である。産婦が亭主を呼ぶ所である。自分が動けないから、亭主を呼ぶのは、當然と云ふ心であるので、横柄な語勢で亭主を呼ぶ。

あだついた客は梯子でどうづかれ

女郎屋であらう。料理屋でもよい。女にべたついた客が、歸りぎは、階子を下りる時に、女に背中をどうづか

れて、「随分だわねえ」の明和語をあびせられる所

猿田彦角をはやして吸付ける

例の祭列の猿田彦。休む時に、鼻高の面を頭の上へずり上げて、煙草を一服吸付ける。すると高い鼻が頭上に聳えるので、角が生えたやうに見える。

撥貸して見に行けば咽撫でゝ居る

お宅の三味線の撥を貸して下さい、象牙のを貸して下さいと云て来た。貸してやつたが、あの内で三味線弾く人は無い筈、變だなと見に行くと、さっきの撥で咽を撫でゝると云ふので、咽に骨を立てた時、象牙で咽を撫で

ると取れる、と云つたもので、これは今でも或人には信ぜられてゐる。

年禮に股引のいる縁を組み

大變に遠い所と縁組したので、今年からは年始まはりに、股引をはいて、端折つて行かねばならぬことになつた。

髭ぬきの鏡に娘氣をへらし

或男が、娘の鏡を借りて、毛抜で髭を抜く。見てゐると、ツンツンと力を任せて抜く毎に、大事の鏡に疵がつきさう。なほ又男のことだから、かまはず鏡を顔に近づ

「氣をへらし」甚しく心配すること。

けて、そのため息がかゝつたり、ひどい奴になると、抜いた髭を鏡に植ゑる。鏡を大切ににする娘、その氣減らざるを得むや。

賣上は稻こきの齒に食はへさせ

百姓が何か青物を賣つて歸つて來た。女房が稻をこいて居る。賣上錢を、女房に渡さうとしても、手がふさがつて居るから、その齒にくはへさせる。

前にもあつたやうに、遣手の齒へ祝儀をくはへさせた、昔の人は錢を口で扱ふ事が多かつたやうである。

此石がそだかといへばもう眞似る

「そだか」其れだか。

其れを、そ、とのみ云ふこと今も名古屋邊に残れり。

伊勢國度會郡一の瀬川の南、南中と云ふ所に、鸚鵡石といふ十丈程の、青黒い石がある。その石の邊で物を云ふと、石の中で物云ふやうに、反響する。その石の位置か形が、反響するやうな工合になつて居るものと見える。「この石がそだか（其れ、即ち鸚鵡石か）」と云ふと、もう石は「この石がそだか」と云ふ。

よし町で客札貰ふ後家の供

よし町のかげま買ひに行く後家の供が、かけまから、あいそに、客札即ち芝居の入場券を貰つたところ。成程ありさうなことである。かけまと役者とは知己が多く時には兩方かけ持ちのもあつたらうから。

子のうちの支離に譲る水車

百姓が子に財産を譲る場合、かたはの子には水車を譲ることにした。水車の世話なら、びっこ等でも出来るからである。

丸顔を味噌にしてゐる輕井澤

輕井澤ぢや、丸顔の女はひどく味噌をあけてる、即ち自慢してゐる。別に器量がいゝのでも何でも無く、たゞ輪廓の丸いと云ふことが既にこの世界では大したことである。

小腕でも長刀ばかり二本しめ

牛若が、五條橋で辨慶の大長刀と渡り合つて、勝ち、又吉次と一緒に青幕へ來かゝつた時、熊坂長範が大長刀を振つてかゝつた。それを遣つつけた。ともにまだ小腕の牛若丸時代の事件。

「輕井澤」信州の輕井澤。こゝに賣女あり。山間蠻味多きを川柳に興がりて寫す。

「しめ」しめつけた、

やつけたこと。

指を切るからは九品の淨土まで

心中立てに指を切るからは、その報いとして、來世までも添はねばならぬと云ふ女の思はくである。十本の指を一本切つて九本と云ふのを九品にかけての洒落のみ。指を切ると云ふ事は、聞いても厭な氣のする習はしであつた。自分で切る氣丈者ももとよりあつたであらうし、初めの頃はそればかりであつたらうが、後には、朋輩な

「九品」極樂往生の等級に上中下の三品ありその各に上中下の別あり、都合九品にわかるそれより、たゞ淨土と云ふことを九品淨土と云ふ。

どに切つて貰つたので、血止め薬などを用意し、臺の上へ指をのせさせ、それに刃物をあてがひ、重いものでコンと叩きつけて切つたものである。中には本物の指で無い作り物を紙に包んで贈るやうな事もあつた。

花智の馳走に破る村法度

花智を祝ふ爲には水祝だの、或は石を投込む等、随分いろく、荒い事が田舎にはある。その際自然村の法度の禁を犯すやうなこともやる。

寝てゐるは第一番の薬取

昔は、醫者へ薬を取りにやると、ひどく待たされたも

「薬取」薬を取りに来る者を、患者と區別して、醫者の方にて、薬

取と呼べり。

ので、女關を賑やかに見せる爲に、醫者の方で、わざ／＼長く待たせて、薬取が溜るやうにしたものである。だから、薬取りに来た人は欠伸をしたり、居眠りしたりしてゐる。中に本當に寝入つて了つて居るのは、第一番に来た薬取なのである。

國者に屋根を教へる中田圃

國もとから今度出て来た者に、中田圃で、むかうに並ぶ屋根を指さし、「そら、あれが吉原だ。」と教へる。

見のがしにすれば遣手も損は無し

吉原で、馴染客が他の家へ遊びに行く事がわかると、

待伏せして、ひどい目に合はせたものだが、遣手がその客の歸りを見つけて、知らぬ顔して見のがしにしてやれば、損は無、きつとそのうち其客が遣手に禮金を呉れる。

玄關番くさくとする下駄の音

玄關番、今日は機嫌が悪いのに、また朝から無暗に客がある。さう思つてるうちに、又カラく、エ、又来やがつた。

岡場所湯の花くさい禿が出

岡場所で行くと、湯の花の匂ひのする禿が出て來ると

「くさくとする」むしや、くしやと癩にさばる心持。

「湯の花」硫黄を含む温泉の底に溜るがす。

云ふのである。別に岡場所の禿が硫黄を含有してゐるのでも無いが、香料なども着けず、洗ひざらしの着物など着た者は、成程湯の花に似たにほひを放つものである。諸君が各自電車などで氣を付けるとわかる。今も昔も同じ事である。この「湯の花くさい」と云ふので、けびた「こぢよく」の印象が如何にもハッキリしてゐる。風葉君が、木賃宿を描いた小説の中に、或男の女房を「乾鱈のにほひのする女」と書いた。成程さう云ふ女がある。又或友人が、賣色のなかには、ともすると煙草くさい女がある、と云つた。成程さう云女があらう。さう云ふ臭氣の印象を捕へて其者を寫し留めると云ふ事、それをこの句は爲てゐる。

粉こなのふいた子こを抱だいて出でる夕涼ゆふすずみ

湯上ゆめがりの子こに、天花てんくわふん粉こなを打うつて、それを抱だいて涼すずみに出でたのである。干柿ほしがきがその身みから粉こなをふいたやうに、子こ供どもの身みから粉こなをふいたやうに見立みだてた所ところが妙めう。

新發意しんぱちの寄よると輪袈裟わげさで首くびツ引びき

前まへにも新發意しんぱちの句くがあつたが、これも同おなじく其その無邪むじや氣きさを寫うつしたので、一寸ちよつと新發意しんぱち同志寄ちゆうしよると、輪袈裟わげさで首くびツ引びきをして遊あそぶと云いふのである。どうもこの句くは想像句さうざうくで詰つらぬ。

辻番つじばんへ守もりが差圖さしづのかしは餅もち

丁度今交番ちやうどいまかうばんへ子守こもりや子供こどもが行いつて、巡査じゆんさに親おやしむやうに、辻番つじばんへ子守こもりがよく行いつて、そこらで遊あそばせて貰もらつてゐる。だから、五月ごがつのかしは餅もちを配くばる時に、子守こもりが、あの辻番つじばんへ一箱いっぺん差上さしあげて下ください、と提案ていあんし、その爲ため持つて行いく事ことになつた所ところ。

祝いはひ日に疵きずのついたる涅槃像ねはんざう

二月十五ごご日にちが涅槃會ねはんえで、各寺かくじ涅槃像ねはんざうを出だす。一體たい一日いちじつと十五日ごじちとは祝いはひ日にちであるのに、この月つきの十五日ごじちは釋迦しやまの死體したいの畫ゑが出でて、疵きずがついた。

日ひの暮くれに高輪たかなはの戸とは惜をしくたて

「辻番」今の交番にあたる番人詰所。

日暮に戸を立てるのに、高輪は、海の夕景が非常によ
いので、いつも惜しい気がする。

大瀧は一言も無い所なり

大瀧は相州大山にある瀧である。前にも云つたやうに、
盆の債鬼遁れに大山詣する者がある。所が大瀧で債主に
出つくはした。こりや一言もない。「大瀧でさんけくを
ぶちのめし」と云ふ句もある。

そこら中蓋を明けく亭主ぶり

ひとり者が、人の訪問を受けたのか。内儀の不在か、
或はさうで無くて、斯う云ふことを自分で爲る習はしの

「ふし見世」ふしとは
五倍子のこと。ぬるで
の木に生ずる薬物にて
お齒黒に用ふ。淺草に
楊枝及びこのふしをひ
さぐ見世並び居たり。
楊枝見世ともふし見世
とも呼ぶ。見世毎に若
き女を置きたり。

主人公か。とちかく、「一つ何か御馳走を」と、蓋物をい
くつも明け散らして、天門冬の砂糖漬や、虎屋の饅頭や
そのうちには、酒の肴に、なめ物などを陳列する所。

ふし見世は晝食の時尻を向け

狭い構へであるので、店番してゐる美しいのが、飯の
時には、その座で、たゞ向きだけを變へて、往來へ尻を
向けて食ふところ、先づ今の仲見世で想像したら宜から
う。

行燈で食ふは大工も仕廻の日

しばらく通つた大工も、やつと今日仕事了へた。少

うしの仕事を明日に残したくなく、又あと片附けもある
ので、いつもより遅くまで働いて、夜に入つて、夕飯を
食ふのである。先方でよばれたと見ても、遅く歸つてう
ちで食ふと見ても宜い。

「京町」吉原の最も奥の町。

京町へ来る鬼灯はえりのこり

鬼灯賣る者が、大門を入つて、仲ノ町、江戸町、揚屋
町など、賣つて、最後に京町へ来る順序だから、「えりの
こり」。

張物に嫁は結ばぬほうかぶり

張物を嫁がして居る姿を寫した。手拭をバツと頭へか

むせた儘で、時々その端を齒でくはへたりなんかして
る。艶な繪である。

晝買つた螢を隅へ持つて行き

晝買つた螢を、隅ツこの暗い所へ持つて行つて、光ら
せて見る。

「かゝへ帯」しんき。

あい〜といふたび締めるかゝへ帯

着物を着て居るところを、人に呼ばれてる所。あい、
あい、と返事をしつゝ、かゝへ帯を締めてる所。

「小枕」髻の根に入る木。

小枕の縮りかげんに目をふさぎ

髪を結つて貫つて、髻の小枕を締めて貫ふ時、無意識に目をふさぐ。締め加減を感じる爲の自然の働きである。女のよく爲る舉動を捕へたので、艶味があり可笑味がある。

仲人を地ものと思やないこ持

このごろよく出入する仲人。普通の人と思つて居たのに、よく聞いてみるとお間だつた。道理でよくまくし立て、喋ると思つた。

車引き女を見るといきみ出し

今はあまり然う云ふことは無いやうだが、このころは

「車引き」荷車引き。

「扇箱」進物の箱入扇年禮の配り物なり。

「いろは茶屋」谷中感應寺の門前に暖簾に「いろは」と書きたる水

やなぎ樽評釋

荷車引く者が、往來で、盛に通行の女を冷やかしたもので、さう云ふ事を叙した柳句が多い。これもそれで、女を見ると、急に、エンヤラ、ヤレコラ、と急に威をつけ出し、果ては、すますな、抱きつけ、など、厭がらせを云つて通る。

扇箱鳴らして見てはのしを付け

若しからのがあるとお大變だから、ガラ／＼と鳴らして見ては、のしを付けて行く所

いろは茶屋客をねだつて富を付け

いろは茶屋は、富突の本場の感應寺の前だから、錢が

茶屋並び、隠し賣女を置きたり。客は多く僧侶。

「富」神社佛閣の修繕費をつくる爲に、富突の興行を許されぬたり就中、感應寺、湯島天神、目黒不動、盛なり富の札を多く賣り置き定日にそれ等の札と同番號の札を箱に入れ、小口より錐にて、札を突き上げてなるなり。いろ／＼の當り札あり。大いなるには千兩の當りもあり。

あらば富の札が買ひたい。それで客にねだつて、それを買ふのである。「富を付け」とは、富の札を買ふことである。

藪入の供へは母がのんでさし

藪入の娘の供をして來た男に、母が先づ自分でのんで

から、盃を與へる。その程度の饗應を自然にする所が可笑しいのである。

手代共ねぶと盛りであんじられ

手代等が皆ねぶとの出来る最中の者ばかりで、主人は御心配である。

飯時といへばぬし屋はによつと出る

長持や筆筒など、せいの高いものゝ間にはさまつて、ぬし屋は仕事して居る。もうおひるですよと女房が云ふと、今まで姿の見えなかつた塗師屋によつと立現はれて食ひに行く。その出現する時の可笑味。「によつと」と云ふ

「ねぶと」腫物。癩に似て輕し。なほりても又出来る性のもの。春情盛なる時代によく出来るものなり。

「ぬし屋」漆ぬる職人。

語も、粘りがあつて塗師屋然としてゐて宜い。

「麥を食ひ」田舎で暮らすこと。

親類のもちあまされは麥を食ひ

親類相助けて、町で活計を立て、居るが、その中で、どうしても町では暮らしかねるのが出来て、これは親類で支持が出来ぬので、田舎へ行くことになつた。

下戸の禮者に消炭をぶんまける

御年始に来る人、上戸には、火どころか、屠蘇を出すので、先方も、方々でよばれて、温まつて居るが、下戸の禮者は、寒い顔をして来るので、何よりも火が馳走、消炭をありつたけ火鉢へぶちまけて火をおこす。

「禮者」年始の禮者。「ぶんまける」ぶちまける、を更に勢よく云つた語。

「樽拾ひ」酒醬油のあき樽を拾ひ集めにまはる小僧。「目合ひ」すき。

樽拾ひ目合ひを見ては脈を上げ

正月には樽拾ひも凧でも上げたいが、やはりゆつくり並の子供のやうに遊んでは居られぬ。しかし仕事の一すきがあると、往來へ出て、數分間凧を上げて見ると云ふあはれさ。あれも人の子。

あの中で意地の悪いが遣手の子

子供が大勢遊んでる。それを見てゐての句。一人意地の悪い子がゐる。それは遣手の子であると。遣手は意地悪そのものゝやうに云はれてる。だから子もそれを傳へてゐる。

「御傳馬」傳馬舟。運送に用ふる小舟。

御傳馬で行けばやたらに腹を立て

吉原へ行くのに、傳馬舟にのつて行くと、猪牙と違つて、まだるつこいので、腹を立てる、と云ふのであらう

生酔の琴をけなしてとら〜寝

時間を多量に含む句とでも申しますかな。宴席で琴が始まつた。酔拂が、「なんだツ〜か、不景氣ぢやねえか、三味線をなぜ弾かぬ、」など、さんざつばら琴をけなしたが、そのうち、おとなしくなつた、と思ふと、グウ〜。

ぶちまけた跡は駕昇湯氣が立ち

引ケまでにやつつけやせうか何かで、中を飛んで来てさて客を下ろすと、駕かきは二人ともホツポと湯氣が立つ。「ぶちまけた」と云つたのも、景氣よく下ろした様がよく出てる。

中宿で先づ初手のから封を切り

久しぶりの吉原行き。中宿へ来ると、こゝへ女からの手紙が届いて、五六通も溜つてゐる。まづ初めの方から封を切つて、読んで行く。

勞瘵に母はおどけて叱られる

勞瘵の人は、氣のふさぐもので、何も面白くない。そ

「勞瘵」今のいはゆる肺結核など。

れにふいとその病人の母が、冗談を云つて、病人に怒られた。

ちつぽけな桶で鑄かけは手を洗ひ

今もこの儘の所を見得る。鑄かけ屋が仕事を済ました所を見ると、甚だ小さな桶で手を洗ふ。その可笑味。

「寄せる」片寄せる。

縫ひ物を少し寄せるも禮儀なり

「念頃ぶりはそばへ脱ぎ」とどこか似た向の句。針仕事をしてゐる所へ、客が来た。これはお珍しいまアどうぞと少し縫ひ物を片寄せる。そこへ坐れる程に片付けてはしまはず、ほんの形式だけ、一寸寄せる。そこを捕へて

あアするものも、一つの禮儀だと笑つたのである。

「草市」のころは十三日の朝早く立ちしなり。

樽拾ひとある小蔭ではごをしよひ

又正月の樽拾ひができました。樽拾ひが、路次か何かを通つてゐる時、どこから飛んで来た羽子だか、肩のあたりへ落ちた。

草市はひだるい腹の人ばかり

今の草市を見馴れた目でこの句を見るとわからぬ。「今日があたりと粟坊を直切り」と云ふのもわからぬ。日の出前うす暗いうちから立つた當時の草市である。だから、朝飯前の人ばかりで雑沓するのである。日の出た頃

は草市のおしまひ時分である。

飼鶴は袴着て居る人へ行き

鶴の飼つてある家へ、數人客に行つたところが、鶴は袴着てゐる人の方へ近寄り、着流しの人には寄りぬと云ふ趣。上品な鳥だから、上品の人に近づく、と云ふやほり机上作。

約束をちがへぬ紺屋あはれなり

「あさつて」を繰反す例の紺屋と違つて、チャンと約束通り、染めて出す紺屋は、餘程はやらぬ紺屋で、あはれである。

和藤内一家の義理は缺き通し

和藤内は明國の忠臣鄭芝龍と日本の女との間のあひの子。大明國の爲に大いに義兵を起し、働いた事は、國姓爺合戦の淨瑠璃で見てもわかる。それを、あんなに外へ出て働いてばかり居ては、自分の一家の義理、親類への祝儀不祝儀などは、頓とする暇が無かつたらうとの句。

夜そば切ふるへた聲の人ばかり

夜の蕎麥屋へ、寒がつて聲もふるへて「ブル、、、寒いく」と云つてゐる人が集つてゐる。

飛鳥山毛虫になつて見限られ

飛鳥山は、花見の遅い方の部で、いつまでも花見客が来るが、毛虫が出る頃になると、さすがに見限られて、誰も顧み手が無くなる。

片棒をかつぐゆうべの鰻仲間

昨夜一しよに鰻を食つたが、一人毒に中つて死んだ。鰻食つた仲間が、今日の葬ひに、棺の棒の一方のかつき手になつてる。

初鯉薬のやうにもりさばき

高價な初鯉を、少うしづゝ分配する所を、薬を盛るにたとへた。「もりさばき」の「さばき」がよく利いて居る。

連に禮云ひくゝなまな封を切り

外出の途中で甲が友達に逢つた。その友達乙は昨夜遊びに行つて、今歸つたところ。乙は甲の馴染から甲へあてた手紙をことづかつて來た。それを甲にわたすと、甲は乙に禮を云ひながら、まだ濡れてる封を切つて、歩きつゝ讀まむとする。

口近い化物で先づ一つ消し

百物語をする所である。百物語は一種の遊戯で、燈心を何本もならべて、明るく火をともし、一人が一つづゝ化物の話をしては、一つづゝ消して、話が積んで、怖しさが深くなるに従ひ、行燈が暗くなる。その頃に、いろ

く人を脅がす趣向などもすることがある。元來は話を百したものであらうが、後には、その數に充たすとも、かやうの怪談會を、百物語と稱へた。

この句に寫したのは、百物語の初まりの所。まづ何か、直ぐ口に浮む、大入道とか一つ目小僧とかの話をして、先づ一つ消したと云ふところ。

のびの手でつかんではなす削かけ

立つてる。立つて大のびをして、其の手が、削かけにさはつたので、無意識にそれを掴んで、またはなす。例の無意識な行動の寫生である。斯う云ふ行動にも、おのづから時代のかたがある。

「のびの手」欠伸の手「削かけ」柳又は檜の枝を切り、これを削りさしにして茅花の如く作りたるもの、正月十五日に門戸などに懸けて呪とす。

「入王」將基にて、敵の陣中にこちらの王が入込みたること。

入王と聞いて火を引く料理人

入王になつたと聞いたので、それぢや、際限なく勝負が長びく、もう打切りにして貰はうと、料理人が火を引いて了ふ。前の「逆王を貰ひに出たる料理人」と同趣の作。

「通りもの」通人。

通りもの羽織ほうるが癖になり

通人は、酒席などであつくなると羽織を脱いで、むかうへ投げる。それを女中か何かと疊んでくれる。その癖がついて、まじめな席でも、つい羽織をほうり出す。

油揚をさげたばかりで夜を明かし

夜、油揚を買ひに行つたが、さけて歸つて來る途中、狐に化かされて、あちこち夜通し歩きまはつて、夜を明かした。

塗桶へ書いて口説けば指で消し

綿摘は一人く塗桶をひかへて、綿をのぼしてゐる。その一人を口説かうと、塗桶へ息かけて、指で意を書いて見せると、綿摘不承諾やら、指で、こちらの指のあとを消した。

座頭の坊せくと淺葱に目を開き

盲がせきこむと、薄青色に目を開く。

「金谷」遠州大井川の
西岸の驛。

金谷から白ひき歌を覚えて來

大井川の川止めにあつて、金谷に長らく逗留した。その間、何も所在が無いので、覺えるともなしに、其地の白ひき歌を覚え込んで了つた。それが思はぬ土産になつた。

その手代その下女晝は物言はず

有名な句である。或手代と或下女と關係がある。晝間は氣取られぬやうにと、普通以上に、この二人が疎くして、互に一口も物を云はぬ。その様子見えるやう。

藪入の出がけに物を隠される

こんな事は今でもよく遣る。盛装していざ出かけると云ふ時、その小風呂敷か何かを、誰か隠して、まごつかせる。名句である。

三圍のあたりからもうぶちのめし

花見か何かで向島へ来た。三圍邊から、甲は頻りに吉原行を發心して、乙に、「おい、どうだ、行かうぢや無いか、おい」と乙の背中を胸突いて、そゝのかす所か。

田樂を面白く食ふ座頭の坊

盲が田樂を食ふ様子を見てゐて、面白がつた句である。目明きが食つても、不器用にすると、豆腐疊へベタリの

失態などをやる。この句は盲が器用に食ふ食ひ方を面白がつたのである。「面白く食ふ」とはよく云つた言である。

二階から落ちた最期の賑やかさ

二階から落ッこちて、打ち所が悪くて死んだ。ドサクドタン、ウーツ。バタ／＼と人々が駆付ける。水だ／＼お醫者を呼んで来い、大騒ぎである。人の臨終にもいろ／＼あるが恐らく二階から落ちて死ぬらる、賑やかな死に方は無いだらう。妙句々々。

「辻切」往來の人を切殺すこと。

辻切を見ておはします地藏尊

田舎道の辻切。慘澹たる立廻りを、そこの石地藏尊が

黙つて見ておいでになる。

初旅へ晩はこれぢやと二本出し

「二本出し」は指を二本出したので、それは飯盛の枕代の二百を示したのである。初めて旅に出る男に、朋輩がからかつて、「おい、今夜はこれだぜ。」と指を二本出し、二百出して飯盛を買ふのだ、との意を示した所。

「源左衛門」佐野源左衛門常世の事。

源左衛門鎧を着ると犬が吠え

鎌倉に夥しく上ると聞いて、すは一大事と、久しぶりにちぎれ鎧を、取つて投掛け、出ようとすると、見慣れぬ姿になつたから、近所の犬が、常世ぢや無いと思つて吠

え立てる。

商賣も國と江戸とは雪と炭

「雪と炭」とは雲泥と同じやうに、大變な相違があることにとたとへる。越後あたりの者が江戸へ出て炭を賣る。物の賣れることは、國もとよは比較にならぬ、と云ふことを、國の雪と、商ひの炭とで、形容したまでの句。

地紙賣り目につく迄は指をなめ

前にも出た「地紙賣り」である。どの地紙がいゝか、客が選まうと、一枚々々地紙賣りが指をなめてははぐるのを見てゐる。これが宜いと客が目をつける迄は、地紙

賣りが指をなめると云ふので。

算盤を控へたやうな團子茶屋

串にさした團子を並べてゐる所を算盤に見立てたのである。

そこ搔いてとは厭らしい夫婦中

妻が夫に云つたのである。丁度背中が痒いので、「そこ搔いて」と夫に頼んだ所、甘たれた厭らしい夫婦である。

踊り子の隠し藝までして歸り

踊り子が招かれて、いろいろ藝をしたが、遂に隠し藝

「踊り子」橋町、難波町、村松町あたりを第一の根據地としたる一

種の妓。大名旗本の屋敷國持大名の留守居衆の集會などにも招かれて盃盤の周旋せしもの。實は藝者と賣色とを兼ねしもの。

までして歸つた。と斯うだけでは何でも無いが、さう無事な句では無い。こゝの「隠し藝」は口に云へぬやうな藝である。

四日から年玉ぐるみ丸くなり

年禮を僧侶のするのは、正月四日から、三ヶ日はひかへたもの。そして僧の年禮には、曲物に入れた納豆をおもに年玉にしたものである。だから四日から、丸い頭の人、丸い年玉持つて來るので、「年玉ぐるみ丸くなり」と笑つたのである。

小力があるで若後家じやれになり

「じやれ」戯れ。

若後家にしなだれかゝつた男がある。彼女が腕力が無かつたら、大變な事になつたのであるが、幸ひ一寸力があるので、男の手を寄せ付けず、仕方が無いから、男も冗談にして了つて陣を引き、後家も笑つて、たゞ一場の冗談、じやれ、として済んだ。

日本の狸は死んで風起し

鞆は狸の皮で造つたものである。それを、唐土の虎は死して皮を残す、と云ふ諺の口調を借りて、斯う云つたのである。

芝居見の證據は女中先に立ち

芝居見物だから、女中は先を急いで、眞先に立つて行く。

「ざいをふり」大將がざいを振つて軍の進退を號令する事より、何にても主張し指揮する事を斯く云ふ。

錢なしの癖にいつてもざいをふり

團體でどこかへ行く時、晝飯はどこで食ふとか、道順はどう云ふ風にするとか云ふ事に就て、甲といふ男が一々主張して指揮者になる。あの甲は今日に限らずいつでも指揮者になる男だ。そして貧乏人である。貧乏人かともすれば威張りたがる有様を寫す。

あら世帯何をやつても嬉しがり

新世帯は道具が揃はぬので、箸一せん遣つても、何を

遣つても、心から嬉しがる。

はつ雪に雀毘とは耻知らず

初雪が降る。少し物を知つて居る者は、改まつて雪見をしないまでも、景を賞玩はする。それをこの雪に乗じて雀毘張つて雀をとる奴がある。餘程の不風流漢であることを自ら耻かしくなく表示して居る奴ではある。

雨やどり額の文字をよく覚え

山門か繪馬堂か、或はその他か。とにかく額のかゝつて居る所に、俄雨を避けて雨宿りして居る。所在なさに、無意識に目はその額に向いて、覚えぬでも宜いに、その

額の文字を、よくく覚え込む、と云ふ滑稽。

「あら打」荒打なり。土蔵壁を塗るに、壁下地出来たる後、先づ荒打とて、粘着力ある土に糞坊を入れて練合せ、小舞へ塗付くること。

あら打を遠くへ寄つて目出たがり

荒打の時には、泥が盛にはねるので、家の者等は近づくかず、遠くへ寄つて、見て居る。「目出たがり」は、愈本塗にかゝる第一の業であるので祝意をあらはすのである

江戸へ出る日には手作の髷を出し

田舎の女である。髮結などの手にはかゝらず、いつも自分で結ふ。今日は江戸へ出る用があるので、自分細工に、いつもより髷を張出させて、おしやれた所、手作の麥などいふ「手作の」と云ふ言葉を、髷に云つたので

いかにも當を得てる。

屋敷替白狐の言ひおくり

屋敷を移轉する時、あとに住む人に、こゝには白い狐が居ます、夕方にあの藪の口へ油揚を五枚必ず置いて下さいませ、と狐の待遇法を言ひつぎに教へておく所の昔の心持がよく出てゐる。

蟻ほどこに千疊敷の疊さし

千疊敷の座敷の疊がへで疊さしが這入つてるのを見渡すと、蟻くらるに見える。

見知りよいあたまは御所の五郎丸

御所の五郎丸の頭は大唐輪で、特色があるので、見知りよいのである。

腰帯を締めると腰は生きて来る

女が着物を着てゐる所を見ての句。腰帯をせぬうちは腰の邊が締めまりが無くて、何の榮えも無いが、腰帯をキリ、と締めると、腰の美が輝く。そこを「生きて来る」と云つた。

乳貫ひの袖につっぱる鯉節

妻に死なれて、孔呑子を残された男は、今でもみじめ

であるか。昔、牛乳など云ふものも無かつた時代には、殊に困つた。乳の出る人の所へ頼んで、日に何度か、氣がねしいく、飲ませて貰ひに行つたものである。そしてその間には、鯉節などをしやぶらせて置いた。これは乳貰ひが、途で鯉節を買つて、袂へ入れてる所であらう。

これ小判たつた一晚居てくれろ

金と云ふものは、まづ普通の家では、とかく尻焼猿で落着きたがらぬもの。這入つたと思ふと、直ぐに出て行く。こゝに或人あり、思ひあまつて小判に云つて曰く、「これ小判たつた一晚居てくれろ」。切なる願である。蓋し萬人の願である。

「大くべ」くぶ、は燃やすこと。風呂の下をくべるなど云ふ。大くべは、大きな焼けた木

琴やめて薪の大くべひき給ふ

忽然として斯う云ふ大古典を詠じてる所が柳樽の面白い所だ。古事記の、高津の宮即ち仁徳天皇の段に、次の記事がある。

「此の御世に、免寸河の西の方に一高木ありけり。其の樹の影、日に當れば、淡路島に逮び、夕日に當れば、高安山を越えき。故、是の樹を切りて、船に造れるに、甚、捷く行く船にぞありける。時に、其の船の號を枯野とぞ謂ひける。故、是の船を以て、旦夕に、淡道島の寒泉を酌みて、大御水、献りき。茲の船、破壊れたる以て、鹽を焼き、其の焼け遺れる木を取りて、琴に作りたりしに、其の音、七里に響えたりき。爾、歌曰

枯野を 鹽に焼き 其が餘り 琴に造り 掻き弾く
や 由良の門の 門中の 海石に振れ立つ 浸漬の
木の 亮々

この史實を云つたので、普通の琴で無く、薪の焼えほつ
くいの大きなのを弾き給うたと云つたのである。

状箱が來れば呼ばれる太夫坊

木曾義仲は禮儀作法も何も知らぬ、山出しの猿みたく
に云はれてる。他から手紙でも來ると、どうしてよいか
解らぬので、いつでも直ぐに太夫坊覺明を呼ぶと云ふの
である。

「太夫坊」木曾義仲の
祐筆覺明のこと。

「百ほど」錢の百にあ
らず、何度もくく繰返
し頼むを云ふ。
「豆腐の湯」洗濯に使ふ
に効多し

飯たきに百ほど頼む豆腐の湯

飯たきに、豆腐の湯を棄てないで、私に呉れ、と頼む
忘れるといけないから、何度もくく繰返し頼む所。

迷惑な顔は祭りて牛ばかり

山王祭、神田祭など、祭の山車は牛に曳かせた。人間
はみんな馬鹿に面白さうであるが、その中で、牛だけは
重いものを曳かされて迷惑な顔してゐる。

桶伏せをはじめて通る日和下駄

桶伏になつてゐるあはれな男を、廊内の通行人が、「こん
畜生」と云つた調子で、手いたづらに、その桶を弾いて

「桶伏」吉原に行はれ
たる私刑にて、拂ひの
出來ざる者を捕へて廓
の往來に入湯桶を伏せ

てその中に押入れ、顔
だけ出せるやうにし、
その桶の上へ木をわた
し重しなその木に結び
たり。斯くして家族知
人等の受出しに来るな
待ちたり。
「日和下駄」このころ
日和下駄は普通の人
はかす、花柳の女や地
廻り遊人の類のみ穿き
たり。

通るところ。

親類が来ると赤子のふたを取り

嫁が初産したとでも云ふ所であらう。赤子は綿などか
ぶせて、一寸見えぬやうになつてゐる。親類がお祝ひに來
る毎に、「まあ見てやつて下さいませ」と、その綿を取つ

て見せるところを、その様子が器の蓋を取るやうで可笑
しいので、斯う云つてその可笑しみを寫しておいたので
ある。

江の島を見て来た娘自慢をし

面白い句である。娘が江の島参りをして来たので、大
旅行でもして来た氣で、人に自慢して話すところ。今な
らこんなことは無い、とふとは思はれるが、どうしてそ
れは或階級の人こそ、方々を自由に旅行をするが、今で
も東京に生れながら、十八九になるまで、上野も淺草も
知らぬ娘が、意外に澤山ある。まして品川の海などは思
ひも寄らぬ。況んやまして江の島をやである。斯う云ふ

連中が、江の島を見て來ようものなら、今でもやはり朋輩に大自慢をするであらう。

明星が茶屋を限りの柄ぶくろ

明星村に清めの茶屋があつて、こゝで旅装を改めて普通のなりにして、参宮したものである。刀の柄に柄袋をしてゐたのも、こゝを限りに、外すのである。

御自分も拙者も逃げた人数なり

太平になつてから、腰拔武士が戦場の醜態を回顧して話し合ふところ。

「明星」伊勢國多氣郡の村。

還俗をしても半分殊勝なり

僧が還俗をしても、どこか半分は殊勝な所が残つてゐるのみでは、あたりまで、味も無いが、この句は、前にも云つた、僧が醫者に化けて吉原へ遊びに行つた所を寫したのである。醫者に化けてゐるから、まさに還俗を一時的にして居るのであるが、どこか坊主らしい言や舉動がある所を、「殊勝なり」と云つたのである。今も、坊主の容は、袖の長い衣の癖がついてるので、着物の袖口を腕をめぐらして、たくし上げるやうにする舉動がある、それで坊主といふことが解る等と云ふ。

「細見」吉原一覽とて

やなぎ樽評釋

細見の鬼門へなほる遣手の名

も云ふべきものにて、
委細のことが一見して
わかるると云ふ意の名稱
なるべし。各樓の女郎
の名及び揚代、主人の
名、遣手の名、禿の名
なども記したり。これ
を賣る細見賣りなる者
明治三十年代頃までは
なほありしやうなるが
今は見受けず、明治に
なりては細見も活字に
なり寫真など入れたり

細見を見ると、遣手の名が、左下の所にある。それを
鬼門と云つたのである。遣手は鬼、魔のやりに云はれて
る故、東北の隅に鬼星あり、これを鬼門とて、萬事に避
くべき方角と、陰陽家の云ひ傳へて今に至つてゐる、そ
の鬼門に、紙面の左下を擬し、遣手を鬼星に擬したので
ある。

袖口を二つならして嫁を呼び

縫物の小言を、姑が嫁にまさに云はむとする所。嫁が
縫つた着物を、姑が檢して見て、その袖口をピン、ピン
と音させて揃へてみて、よく揃はぬので、お新、お新や

と嫁を呼ぶ所 山雨來らむとして風樓に滿つ。

幽靈になつてもやはり鶉をつかひ

謠曲の「鶉飼」を云つたのである。石和川の鶉飼する
者の幽靈が、僧の供養を受ける事を作つたものである。
それに、幽靈が、僧に鶉飼をして見せる所がある。そこ
を笑つた句である。一體これはシテを笑ふは可哀想で、
シテが「其鶉使ひの亡者にて候。」と言ふと、ワキ僧が「言
語道斷の事にて候。」さらば罪障懺悔に業力の鶉を使ひて
御見せ候へ。」と飛んだ討文してゐる。罪障懺悔の爲にも
う一度罪障をして見よとは、この僧がけしからぬ。

羽織はおりきを着て居るも内儀ないぎに皆勝みなかたれ

賭博場とくぱくばである。中に羽織はおりき着た傳法肌でんぽうはだの内儀ないぎが居て、これが盛さかんに勝かち續つけ、野郎やろうども顔色がんしよく無なき體てい。當時たうじの世相せさうの一部いぶが活寫くわつしやされてゐる。

けんぺいに投出なげだして行く質しちの足たし

「どうもこれだけぢや、二兩りやうの御用達ごようだでは出來でません。何分なにぶんこちらの御召おめしは、裏うらがこんな痛いたんで居をりますからな、へエ。」そこで中ちゆう腹はらになつて、萬一まんいちの用意よういに懷中くわいちゆうして來た銀煙管ぎんせんくわんを投出なげだして、これなら宜よからう、と、二兩りやう受取うけとつて、まかり歸かへるところ。

「けんぺいに」權柄けんぺいになり。威張いぢやうつて、なり

駕賃かこしんをやつて女房にようばはつんとする

今主人いましゆじんが吉原よしはらから駕かこで歸かへつて來た。女房にようば昨夜けふから腹立はらたて通とほしてゐるが、駕屋かこやの前まへでそんな顔かほは見みせず、愛想あいせよく駕賃かこしんをやつて、「どうも御苦勞ごくらうさん」と云つて、駕屋かこやが去さるなり、別人べつじんのやうにツンとなる。主人しゆじん公こうかねて覺悟かくごながら、これから朝飯あさめしにありつくまで、多少たせうの手數てすうを要えうすると云ふ光景くわうけいの有様ありさまで△い。

煤掃すすはきの下知げちに田中たなかの局つばねが出

吉原よしはらの煤掃すすはきである。「田中たなかの局つばね」にはいろ／＼の説せつがあるが、卯木うつき氏の説せつでは、吉原よしはらのそばの田中たなか、即ち今いまの田中町たなかちゆうに、吉原よしはらへ出入でいりのお針はりが多く住すんで居をて、それが煤すす

掃の指圖に出て来る、とのことである。大奥の様らしく「田中の局」と云つた所に興味がある。

棟上を名代の乳母の尻へ投げ

「棟上を」例の川柳式の略語で、「棟上の餅を」である。水氣のあるでこの界限で有名な乳母の姿が見えたので、投げる男が、からかつて、その乳母の尻へ目がけて投じた。

柏餅 妹の乳母は手つだはず

妙なもので、兄つきの乳母、妹つきの乳母、と相對すると、そこに意地を持つ。兄の節句で、柏餅つくりは大

多忙の間に、けふは妹が閑却されてゐるその不快に、妹の乳母は、わたしの係りぢや無いと云つた心で、手傳はずに平然として、妹の守をしてゐる。

箱王が兩の袂に蟬の聲

箱王は箱根権現別王院の弟子にやられたが、その方の修行はとんとせず、蟬取りなどして居た様を想像した句。

横町に一つづゝある芝の海

私は電車で芝を通る時、いつもこの句を思ひ出す。今も殆ど同じことである。芝の海岸の方の側は、横町を覗くと、そこに必ず海が見える、それを、海が一つづゝ横

「箱王」曾我の五郎の幼名。

町にある、と云つたので、よくその感じが現はれてる。

茸狩は紅葉狩より世帯じみ

紅葉狩は、その紅葉でどうしようといふ實利方面は更に無い。併し茸狩となると、これを歸つて菜に煮ると云ふことがあるので、たゞの樂しきで無く、實利がそこに含まれてる。そこを「世帯じみ」と云つたのである。

蚊を焼いたあとを女房にいやがらせ

「あと」とは、蚊を焼いた蠟燭のしたゝりで、それが蒲團などにあやしくたれてるのを、云つたのであらう。

長屋中手ごみにはかる田舎芹

八百屋で無く、田舎の百姓自らが芹を賣りに來た。安くて品がよいので、長屋中が出て來て、こちらで勝手に買つてはかつて買ふ。「そんなには」と賣手が云つても、「エ、負けときなよ」と、手を出させず、無理強ひに安く買ふ所を「手ごみに」と云つた。

岡場所はくらはせるのがいとま乞

きぬぐなどいふ上品な風情は逆も岡場所には無い。女が客を送り出し、何か一言二言冗談云つて、女が客の背中を一つくらはせる。よろ／＼として、そして歩み出す。さう云ふ暇乞。

花嫁のあました平へ札を入れ

嫁入の晩のこと。花嫁の食ひ餘したお平の中へ、名を書いた札を入れて、印にして置く。明日餘りを食はせる爲。縁遠い人等に餘りをやると云ふ説もある。

太神樂ぐるりはみんな油むし

太神樂を門前でやらせてる。ぐるりに立つて見てる子供大供達は、皆所謂「油蟲」である。れつきとした観覽場にいふ油蟲と云ふ稱を、大道藝にもつて來た所が可笑味である。

一人者飲まぬかはりに二朱が搗き

正月近い時である。下戸の一人者がある。酒は飲まぬが、その代り二朱だけ餅をつかせて置く。

降參が濟むと一度にひだるがり

戦記物に就いての想像。降參の手續きが濟むと、その武士等が、一齊に、空腹を感じて來る所。

おさらばを障子の内でたんと言ひ

この句を、吉原など、特殊の場所の事にする必要はない。人の去る時、出かけて行つて、入口で、おさらばを云ふべきのを、寒くもあり、不性して障子の中で云ふ。その代りその不性をおぎなふだけ、大きく繰返し云つて

「油虫」芝居をたゞ見る連中を云ふ。淺草傳法院の奴僕等が境内の觀物場に無錢にて押入りし類を云ふ。

「おさらば」左様なら。

おく。よくある事を寫したのである。

道盛は寢まきの上へ鎧を着

道盛は通盛の當字である。平通盛が、養和元年九月、加賀へ入らうとした際、加賀の人稻津實澄が叛して義仲に應じ、陣の後から襲ったので、通盛は麾下八十餘人を率ゐて、必死に戦つた。その時の、不意討を食つた通盛を想像したのである。

保昌は九條あたりへ迎ひに出

藤原保昌は、頼光當時の強い人である。大江山退治に行かなかつたので、頼光の凱旋の時には、九條邊まで出

迎へたらう。

百合若の弓はつぶしにふんで買ひ

物語に残つてる百合若大臣は、むくりが攻寄せた時、伊勢の御神託に、百合若大臣に鐵の弓矢を以て向へ、とあつたのに従ひ、鐵で弓矢を製らせて、向つた、とある。鐵製の弓と云ふもの、道具屋も一寸賣りにくからうから鐵ゆゑ、つぶしの値で買つて行く。

關寺で勅使を見ると犬が吠え

小町百歳の媼になつて、逢坂關の東なる關寺邊に居た帝あはれみ給ひ一雲の上はありし昔にかはらねど見し玉

だれのうちやゆかしき」と云ふ御製を、勅使をして遣はされた。小町その一字だけかへて「雲の上はありし昔にかはらねど見し玉だれのうちぞゆかしき」と返歌を申上げた、と云ふ話がある。鸚鵡小町とて諺にも作られてあるこの事件から、川柳子が、關寺へこの勅使が來られた時は、見馴れぬ形の人が來たので、犬が勅使に吠えたらうと想像したのである。大石真虎の書いた畫本に、五條橋で牛若辨慶の格闘が、二頁にわたつて書いてあつて、その次の頁の繪に、五條橋の橋の袂と、そこに二匹犬が吠え立てゝゐるところ、が書いてある。この行き方と同じである。

「關手形」關札のこと
關所を通る時に見せる
手形。

蠅打でかき寄せて取る關手形

關所の役人、退屈しのぎに、蠅打で蠅を打つてる。通行人が關手形を見せると、面倒くさうに、蠅打で、それをかき寄せて取つて檢べる、と云ふ、見下ろした態度。

生物をかへた婆アぶにんそら

こゝの「生物」は、もう直き賣られて行くべき娘のこととを指したのであらう。「かへた」は持つてゐること。「ぶにんそら」は不人相で、悪相のこと。手を出すものがあると大變だと云ふ心で、悪相な婆アが、美しい娘を護つてゐる様。

御亭主の留守で鯉を手負にし

鯉を買った。亭主が在宅なら、早く賞味して了ふが、不在なので、その儘にしておくと、猫か何かと来て、取りかゝつた。それを逐拂ひはしたが、鯉が負傷して了つた。

別當は馬や狐で茶をわかし

別當は寺院の僧官であるが、徳川時代の稻荷様など神とも佛ともつかぬ所で、事へて居るものは別當と云つた「馬や狐」は繪馬の繪である。即ち別當が茶を沸かす燃料に繪馬を用ひると云つたのである。

神奈川の文は鯉の片だより

鎌倉邊から鯉賣が江戸に向ふ。その途中にあたるからその鯉賣に、神奈川の女郎が江戸客に手紙をこつつけるいづれ無心の手紙であらう。それを江戸の客が鯉賣から受取つても、フ、ンと云つたき返事も出さぬ、即ち「片だより」にして了ふ。

方丈の手から一步がはがして出

方丈が寺へ歸つて来て、貰つて来たお布施を出す所近頃も十錢銀貨などを包紙に一寸貼りつけるやうに、小さな一步の貨幣は包紙に貼りつけてお布施に出したのでそれを方丈が包紙をひろけて、一步をはがして出す様子

を、手からはがして出すと云ふ風に手品を見るやうに見立てたのである。

うツちやツて看板にする紫屋

紫屋は前に云つたやうに染物屋のこと。紫色に汚れた水を、往來へ棄てる。そのらの土が紫色に染まる。それで染物屋の前は紫色になつてるので、遠くから見ても、あそこに染物屋があるとわかる。すなはち、染物屋は、土に看板を出すやうなものである。

だきもりのわりなき無心餅一つ

子守が釣してる人に頼むか、肴屋に頼むのである。子

「だきもり」抱き守りにて、子守のことなり

供が「と、と」とせがむので、子守が折入つて、どうかその小さい餅を一つ下さいな、と頼む。

持参金抱瘡よけの守りにし

あばた面の嫁である。このあばたを云々されるのを防ぐ爲に、持参金を持つて来たので、あばたを保護するお守りの役をその金がかして、と云ふことを斯う云つたのである。理窟にはあはぬ云ひ方である。

坪皿へ紙とはよほど學が長け

坪皿は賭博に使ふ盆やうのもの。それに紙をあてがつて、賭博をすると、音がしない。秘密にやるのには斯う

してやる。そんなことを覺えた奴は、余程賭博學の修行が積んだ奴だ。

雪打をおもの師ばかり額で見

「おもの師」は裁縫師のこと。雪ぶつけをやつて、庭は大騒ぎ、家の中から見物してるものも多い。たゞおもの師だけは、うつむいて仕事してゐて、時々上目づかひして見るだけ。その様子を「額で見」と云つたのである。

半人で仕廻ふ大工に菰を遣り

ひる頃から雨が降つて來た。それで今日は大工は半日分即ち半人分の賃で、しまつて歸るのである。それに菰

を傘の代りに與へる。

つき合で行く深川は箸休め

「箸休め」とは、大きな肴などの外に、豆の小皿盛などが置いてある。その副になる料理をつまむことを云ふ。吉原で遊びつけてゐる人が、人のつき合ひで、たまに深川へ遊びに行くのは、料理を食ふことで云へば、箸休めと云つた形。

合羽箱どろくどろくとかしこまり

大名行列、大手門にかゝり、合羽箱の者等、一時にしやがんで畏る有様である。「どろくどろく」は「ざわくどろく」

「合羽箱」合羽籠と云ふに同じ。大名行列に合羽籠を持ちたる供あり。それを云ふ。

など今云ふと同じく、大勢の人が一齊に動く音を云ふので、芝居のはねる所を寫した句に「先づ今も云ひ切らぬのにとろどろ」と云ふがあり、これは見物の一度に立つ音を云つたのである。

上げ輿のあてにして置く地主の子

葬禮には、普通、棒より下に輿の附いた輿であるが、身分のいゝ人のは上げ輿を用ひた。これは今も同じである。地主が今死かゝつて居る。それで地主の子は、葬式の時には、上げ輿を用ふることに豫算を立てゝ置く、と云ふ所。

「上げ輿」こゝのは葬式の上げ輿なり。かつぐ棒より上に輿を置きたるもの。

太鼓の値出來てから出す火打箱

浅草龜岡町のあたりには、穢多が住んでゝ、太鼓を賣る店が多くそこに在つた。穢多の家の火は汚れてると云ふので、外の人はそので煙草をのむには、切火してのんだ。この句は太鼓を買ひに行つても、少し負けるとか何とかあつて、結局値が定まつて、それでは買はうとなつたので、始めて穢多が、火打箱を輿から出して來て、まア一服ともてなす所。

船頭の女房能い日に洗濯し

よい日に洗濯するは當り前のことで、別に船頭の女房に限つたことは無いが、よつ程よい日に洗濯すると云ふ

のである。船住ひの女房で、晴れて居ても風立つて居てば船での洗濯は出来かねるのである。

「櫛はらひ」櫛の垢を取る小さき刷毛。

これからは行くばかりぢやと櫛はらひ

花見か何かに出掛けるので、女連が化粧で大らんちきをやつたが、やつと皆出来て、さアこれからは、行くだけになつたと、櫛はらひで櫛を掃除して、仕舞つてる所。

よけの歌大屋の内義持歩き

長屋連中は無筆者然らずんば不性者無頓着であるから虫よけの歌も、大屋から貼つてやらねばならぬので、内義が、何枚も「ちはやふる」を書いたのを持つて、あち

「よけの歌」蟲よけのまじなひの歌なり。ちはやふる卯月八日は吉日よみさけ蟲をせいばいぞする。四月八日にこれを細長き紙片に

こち店主の家へ配達する光景。

首取つた其日をきつと精進し

武家のゆかしい一面である。敵の首を取つた其日は、その敵の爲に必ず一日精進する。

そらどくに衣を着せる長屋中

梅毒でひどくなつた男がある。もう手が附けられぬやうになつたので、この上は廻國に出て佛力で直して頂くことにすると云ふので、長屋中の者が寄つて、法體にして送り出す。

「そらどく」梅毒。

書き柱にさかさまに貼りたり。所によりては、この歌の紙の下へ別に「白」と書きたる紙を貼りたり。さうして一年間おき、來年四月八日に貼りかへるなり。

「ひま入」用向出来と云ふ意味の昔の語。

ひま入と書いて来たのは女房の手

ひま入云々と云ふ手紙が来た。見ると、いつもの主人の手で無くて、女房の手である。何か急用で、主人は手紙書くひまも今日は無いのである。

御婚禮蛙の聲をみやげにし

「御婚禮」で上流の婚禮を聞かせた。貝を摺合せると蛙の聲がするもの、芝居でさうして蛙を聞かせる。それで貝合一式を持参して嫁入するのを、蛙の聲を土産に持つて行くと洒落て云つたのである。

「貝合」蛤殻を分配し地貝と稱して各一個づつ貝を出して悉く其場に伏せ並べ、中央に空所を存し、出貝と稱して各一個づゝ其空所に伏せ、地貝と出貝と相合ふものを多く合せ取るを勝とする遊戯。貝の裏に源氏繪など美しく描きて合する便宜にし且つ趣を添へたり。

品川は木綿の外は箱へ入れ

品川の女郎屋へは、先づ木綿物着た客が行つた。そして又増上寺其他あの邊の寺の僧が行つた。僧の遊ぶのは御法度であるから、女郎屋で十分に警戒して、衣の方は箱に入れて、目に付かぬやうにして置いたもの。

荒打に左官ばかりはもとの顔

荒打をする時は、最もひどく土がはねかへる。左官だけはいつも土によごれた顔をして居るから、荒打の爲に特にその顔に變化を見ぬが、手傳つてる者等は皆土で汚れて、常の顔で無くなる。

「きうせん筋」弓箭筋と云ふ手の筋にて、この筋ある人は劍難ありといふ。

「榎合」建物と建物と相接するその間。

「飛びげた」このげたは算盤のけたのけたなり。算盤をこまかす事を、けたを飛ばすと云

大磯にきうせん筋の地藏あり

大磯に化地藏と云ふがあつた。それが化けて出て、旅人に斬られ、其以後その地藏尊に傷がついてる、とのことであつた。即ちこの地藏の手には弓箭筋があつたに違ない。

雛棚の榎合ふさく楊枝さし

雛棚と雛棚との間のすきまを、楊枝さしでふさいだ。

二三間飛びげたのある飾り柿

飾り柿にする前に、誰か一つ一つ間引して食べた。それを、けたが飛んでると云つた。二三間とは大きく云つた

のである。その飛びげたのある柿が飾つてある可笑味。

へり。「飾り柿」正月の注連飾に串柿を飾りたり。それを云ふ。

神馬牽市をつつきつんまはし

浅草の神馬を牽いて来た。折柄年の市で人込みの中を肝走つた馬を牽いて来るので、市を大亂しに亂す様を、「つつきつんまはし」と云つた。

傾城はとつばづしても恩にかけ

傾城が床で取外した。それでもわびをするでも無く、こんな隔意なくしてゐると云ふ意味のことを客に云ふいゝ氣なもんさ。

「とつばづしても」取り外しても。放屁。

「きなか」半文。河岸の相場はきなかでも負けぬ、と云ふ唄の文句あるも、半文でも負けぬの意なり。

一門のきなかと頼む能登守

平家で一番強いのは能登守教經である。それで平家の一門では、彼一人を、一門の半分位に重んじて居る、即ち片腕と思つて居る、と云つたのである。「きなか」は半文であるから、一文の半分、即ち一門の半分と洒落て云つたのである。

四里四方見て来たやうな新茶賣

四里四方は江戸の廣さ。新茶賣とて昔は行商があつたその様子又はその言が江戸中見て来たやうなと云つたのである。今、新茶賣と云ふものが無いから、十分にその趣を解することが出来ぬ。

「そらばん」雙盤として寺にて鳴らす金屬の盤なり。「御十念」十度念佛を唱ふること。

そらばんのひしげた所で御十念

雙盤の音が途切れたところで、和尚が低い聲で南無阿彌陀佛くと十念を唱へる所。音の途切れたのを、物のひしやけたになぞらへて、「ひしけた」と云つたのである。

線香が消えてしまへば一人酒

明治になつても、藝者を呼んで置く時間を、線香何本と云つて居たが、この當時は本當に線香でその時を計つたのであらう。約束だけの線香がたつて了ふと、もとの一人ッ切りになつて、淋しい酒になる。

桶伏の有つて家内が洗足し

某を桶伏にしようといふ時は、その逃出すのを、大勢で追掛けて、取ツつかまへるので、追掛ける者は履物も履くひまが無く、はだしで駈出したので、桶伏をして下つてから、その女郎屋の一家の者が、ヤレくと揃つて足を洗ふ。

下駄さげて通る大屋の枕もと

遅く歸つて来て、大屋の横を通つて、路次奥の家へ行くに、家賃も滞つて居るので、気がねして、下を下けはだしになつて、大屋の寢て居るあたりを、音のしないやうに通つて行く所。

「竈じめ」十二月に竈じめ又は竈扱と云ひて巫女来て竈の扱ひなしたり。

竈じめのうちは飯たきかしこまり

竈じめの間は、いつもかしこまつたことの無い飯焚が我が領内の神事といふので、改まつてかしこまる所。

土こねは手水をつかひ幣を立て

左官の土こねである。こね終ると、汚れた手を洗つてそれから、土を人が踏まぬやうに、目印に紙片をつけた棒を、そこへ立て、置く。そこを神主のやうに見立てた句。

大磯は駈落するに悪い所

大磯は兩方に橋があるので、追手がかゝると、直き捕

はれ易いから。

「しのびごま」三味線の駒に物をばさみ、音の高く立たぬやうにして弾くこと。

しのびごま何ぞいひたい姿なり

艶な絵である。女が唯一人で、縁端の柱によつかゝつて、忍び駒で弾いてる。その様が、何か人に話かしたいやうに見えるると云ふので、人戀しい形を寫したのである。

賽日にあぶなく賞める海おもて

増上寺の山門は、賽日に上ることを許された。藪入の小僧が、こゝへ上がつて、品川海づらを賞める。高いからあぶないのである。

「見たふし屋」古道具屋。

糠袋持つて夜伽の禮に寄り

長く病氣して居た女が、なほつて久しぶりに湯に行くその途で、看病して呉れた人の所へ禮に寄つた所。手に糠袋を見せて、これからお湯へまゐります、と云ふ。まア、結構でございました、と云ふ。

冠を踏違へたる見たふし屋

見たふして、ひどく安く買ふから見たふし屋と云ふ。それが、冠の賣物にあつたが、斯う云ふものは扱ひつけぬので、値をつけ損なつた、それを踏違へた、と云ひ、冠を踏む、と飛んでも無い間違を利かせたのである。

以上私の扱つたうちで、わからぬ爲、除いて置いた句を左に舉げて、大方の教を待つ。

寒念佛鬼で日をつく切り回向

はらませた詮議は是で山を止め

どこぞではあぶなき娘ゆうべ遣り

・片袖を足す振袖は人のもの

大磯の落馬は直ぐに煙草にし

五六町錢屋をたく戻り駕

猿まはし内へ戻てあごを出し

藏の戸が鳴ると盃大きくし

押入の戸やきぬ張て人を呼び

珍しい宮の名を賣る宮雀

掛けひまは暇もくれず目もかけず
御年貢を大部屋へ來てなし崩し
ござばかり一艘に積む渡し舟
居酒屋を止めた仔細は革羽織
吉原の鰐が見入れて紙が散り
舞鶴に水をもらせる殿づくり
汐くみに所望の浪が打て來る
淺草の鏡に千の姿あり

やなぎ樽評釋 終

索引

「」を附したるは、句の初五音なり。これにて其句の解を索むべし。同じ初五ある句は、五音の次の數音を足して出だし、以て紛れを防ぎたり。分類及び順序は假名遣によらず發音によりたり。

- | | | |
|-------------------|-------------------|------------------|
| 「あいくと」……………(二七五) | あくた川……………(二九六) | 「跡月を」……………(二九) |
| 「あいさつを」……………(二〇三) | 上げ輿……………(三三四) | 跡乗……………(三三) |
| 間の宿……………(二三) | 「上げ輿の」……………(三三四) | 「跡乗の」……………(三三) |
| 「あひ惚は」……………(二六二) | 「朝飯を」……………(二二八) | 「穴倉で」……………(八三) |
| 「曉の」……………(二〇七) | 「足洗ふ」……………(二二七) | 「あの中で」……………(二八一) |
| 「赤とんぼ」……………(二〇〇) | 「飛鳥山」……………(二六七) | あぶない事……………(四七) |
| 「上るたび」……………(六) | 「あだついた」……………(二五九) | 「油揚を」……………(二九二) |
| | あだついた……………(二五九) | 油蟲……………(三三) |
| | 「あたらしく」……………(二八) | 「雨やどり」……………(三〇二) |

やなぎ樽評釋索引

「網の目を」……………(一九)	伊豆節……………(五〇)	「犬蓼の」……………(一九二)
あら打……………(三〇三)	「伊豆節も」……………(二五〇)	ぬの……………(八二)
「荒打に」……………(三三九)	伊勢島……………(一〇三)	「入王と」……………(二九二)
「あら打を」……………(三〇三)	「伊勢島の」……………(一〇三)	入王……………(九二)
「あら世帯」……………(三〇一)	「いそがしく」……………(二八二)	「衣類まで」……………(三)
「蟻ほどに」……………(三〇四)	「頂いて」……………(八三)	入髪……………(三)
「行燈で」……………(二七三)	一分……………(四)	「入髪で」……………(三)
「行燈は」……………(二八三)	「一門の」……………(三四三)	「色男」……………(二五)
	いつかど……………(六)	「色事に」……………(二五五)
	「一軒の」……………(二七三)	「いろは茶屋」……………(二七七)
生島新五郎……………(一一〇)	「いつちよく」……………(二八二)	いろは茶屋……………(二七七)
生島大吉……………(一一〇)	「五つ月を」……………(二三)	「祝ひ日に」……………(二七一)
いけしやあく……………(二二)	「いつとても」……………(二五)	岩茸……………(二五)
「居酒屋で」……………(二五三)	「井戸がへに」……………(七四)	「岩茸は」……………(二五)
「居酒屋に」……………(二四)	「稻妻の」……………(二三)	「庵の戸へ」……………(六)
「醫者の門」……………(二三)	犬蓼……………(一九)	

【う】

請状……………(三〇)	「賣物と」……………(七七)	「追出され」……………(二七六)
「請状が」……………(三〇)	「嬉しい日」……………(二三)	「大磯に」……………(三四〇)
「うしろから」……………(五)	江島……………(一〇九)	「大磯は」……………(三四五)
「歌がるた」……………(二三)	「江戸へ出る」……………(三〇三)	「扇箱」……………(二七七)
「内にかと」……………(九四)	「江戸者で」……………(五八)	扇箱……………(二七七)
「團扇では」……………(二三四)	「江戸を出て」……………(二五四)	大くべ……………(三〇七)
「美しい」……………(九五)	「江の島へ」……………(二五八)	大瀧……………(二七二)
「うつちやつて」……………(三〇)	「江の島で一日」……………(二七)	「大瀧は」……………(二七二)
「産籠の」……………(二五九)	「江の島で鎌倉」……………(一八八)	「大つゞみ」……………(三〇)
「馬方が」……………(八五)	「江の島を」……………(三二)	鷗鶴石……………(二六)
梅若……………(二)	繪馬……………(一六)	「大屋をば」……………(三三)
「梅若の」……………(二)	「襟元の」……………(一七四)	岡場所……………(二七)
梅若の涙雨……………(二)	縁切寺……………(三三)	「岡場所では」……………(二七)
「賣上は」……………(六)		「岡場所は湯の花」……………(二六八)
		「岡場所はくらはせる」……………(三二)
		奥家老……………(一〇七)

やなぎ榎評釋索引

【お】

桶伏	(三〇九)
「桶伏の」	(三〇三)
「桶伏せを」	(三〇九)
おさらば	(三三三)
「おさらばを」	(三三三)
お杉お玉	(三六)
お尋ねもの	(七三)
お玉	(五六)
「落ちて行く」	(六六)
御傳馬	(二八二)
「御傳馬で」	(二八二)
「男ちやと」	(二六五)
「男なら」	(二九)
踊り子	(二九八)
「踊り子の」	(二九八)
「お内儀の」	(二〇二)
おなみおはつ	(三八)
「おはぐろを」	(三)
「お初にと」	(九)
お針	(三七)
帯解	(二〇五)
「帯解は」	(二〇五)
「お袋を」	(五七)
「おみさま」	(二八九)
おもの師	(三三)
「親分と」	(六)
「親ゆゑに」	(二三)
「折節は」	(二六)
女形	(三)
懐中の	(二〇六)
懐中の杓子	(三〇六)
「飼鶴は」	(二八六)
貝合	(三八)
「傀儡師」	(四八)
傀儡師	(四八)
外科	(一九〇)
「外科を」	(一九〇)
かゝへ帯	(二七五)
懸り	(二六)
懸り人	(三九)
かくし町	(三〇)
覺明	(三〇八)
「神樂堂」	(三六)
神樂堂	(三六)
霍亂	(二九)
「霍亂も」	(二九)

【か】

「駈落も」	(二〇六)
景清	(二七)
「景清は」	(二七)
「駕賃を」	(三七)
「傘借りに」	(三〇二)
風車	(六三)
飾り柿	(三四)
鹿島	(一八)
「柏餅」	(三八)
片荷づり	(三六)
「片棒を」	(二六八)
「合羽箱」	(三三)
合羽箱	(三三)
「神奈川の」	(三九)
「銅杓子」	(九八)
鐵棒	(二五八)
金谷	(二九三)
「金谷から」	(二九三)
「金持の」	(二七)
「壁のすき」	(五)
竈じめ	(三四五)
「竈じめの」	(三四五)
「鎌足へ」	(二八八)
「髪結が」	(三五)
「上下で」	(三四)
「上下を」	(四)
「かみなりを」	(五)
紙花	(三四)
「紙花も」	(三四)
「神代にも」	(七八)
「禿よく」	(四七)
「唐紙へ」	(九三)
枯野	(三〇七)
「狩人の」	(二四八)
輕井澤	(二六四)
「かる石も」	(二四)
蛙の聲	(三六)
川止め	(二六)
「川止めの」	(二六)
「蚊を焼いた」	(三〇)
「勘當も」	(八九)
寒念佛	(三八)
「寒念佛ころぶを」	(二四四)
「寒念佛ざらの」	(三六)
「寒念佛千住の」	(六四)
「寒念佛みり」	(三八)
「冠を」	(三四七)
「丸薬を」	(二四九)

【き】

- 「吉治が荷」……………(二六〇)
- 「急度して」……………(八三)
- 「きめ所を」……………(三三三)
- 「客分と」……………(四七)
- 伽羅……………(二八)
- 灸……………(一八〇)
- きうせん筋……………(三四〇)
- 「恐悦を」……………(二五)
- 京町……………(二七四)
- 「京町へ」……………(二七四)
- 「切落し」……………(二〇四)
- 切落……………(二〇四)

【く】

- 切見世……………(三三)
- 「切見世は」……………(三三)
- 氣をへらし……………(六一)
- 「喰ひつぶす」……………(二四)
- 食ひつみ……………(四)
- 「食ひつみが」……………(四)
- 草市……………(二六五)
- 「草市は」……………(二六五)
- くさくとする……………(二六八)
- 「草津の湯」……………(二八六)
- 草津の湯……………(二八六)
- 「くじ取りで」……………(二八〇)
- 櫛はらひ……………(三三六)
- 薬取……………(二六六)

- 「薬の苦」……………(二五)
- 「薬箱」……………(二五四)
- 「目近い」……………(二八九)
- 「國はなし」……………(八八)
- 「國の母」……………(五四)
- 「國者に」……………(六七)
- 配り餅……………(七三)
- 「首取つた」……………(三七七)
- 九品……………(二六五)
- 車座……………(二四一)
- 「車座へ」……………(二四一)
- 「車引」……………(二七六)
- 車引き……………(二七六)
- 「黒犬を」……………(二五八)
- 九郎助稻荷……………(二六)
- 「九郎介へ」……………(二六)

- 「黒札の」……………(一七)

【せ】

- 「傾城は」……………(三四一)
- 「外科殿の」……………(三三九)
- 「下戸の禮者に」……………(二八〇)
- 蹴轉……………(一五五)
- 削かけ……………(二九〇)
- 「下駄さげて」……………(三四四)
- 「支關番」……………(二六八)
- 檢校……………(二三六)
- 「檢校の」……………(二三六)
- 「還俗を」……………(三三三)
- 「遣唐使」……………(一六)
- 「けんべいに」……………(三三六)
- 「源左衛門」……………(二九六)

【こ】

- けんべいに……………(三三六)
- けんべき……………(三三)
- 「けんべきを」……………(三三)
- 小謠……………(二三八)
- 「小謠で」……………(二三八)
- 「小腕でも」……………(二六四)
- 「御詠歌に」……………(三二)
- 「降参が」……………(三三)
- 「降参の」……………(二〇)
- 「碁敵は」……………(二五七)
- 「子が出來て」……………(二五)
- 護國寺……………(六)
- 「護國寺を」……………(六)
- 「御婚禮」……………(三八)

- 御菜……………(一〇〇)
- 「小座頭の」……………(七〇)
- 腰帶……………(三二)
- 「腰帶は」……………(二二)
- 「腰帶を」……………(三〇五)
- 「小力が」……………(二九九)
- 腰繩……………(一五六)
- 「腰繩の」……………(一五六)
- 「御自分も」……………(三三)
- 「腰元は」……………(一八四)
- 御十念……………(三四三)
- こすい……………(二五七)
- こぜ……………(一〇)
- 「こそぐつて」……………(二六)
- こぞろ……………(二五六)
- 小粒……………(一七)

- 白旗稻荷……………(一六)
- 白拍子……………(二〇)
- 尻知らず……………(七六)
- 「尻持に」……………(一九〇)
- 「じれつたく」……………(二五)
- 四郎兵衛……………(三)
- 「四郎兵衛も」……………(三)
- 驛引……………(五五)
- 「驛引の」……………(五五)
- 新造……………(二四五)
- 「新造の」……………(二四)
- 「新そばに」……………(二五一)
- 「新田を」……………(九〇)
- 新發意……………(九四)
- 「新發意の」……………(七〇)
- 「新發意は」……………(九四)
- 針明……………(三七)
- 針妙……………(三七)
- 「針明の」……………(三七)
- 「神馬牽」……………(三四一)
- 「親類が」……………(三〇)
- 「親類の」……………(二八〇)
- 「菅笠で」……………(五)
- 「菅笠の」……………(九)
- 「袖經」……………(二六)
- 「袖經は」……………(二六)
- すさ……………(五二)
- 「雀形」……………(二八)
- 「雀形」……………(二八)
- 「煤掃の孔明は」……………(二〇七)
- 「煤掃の下知に」……………(三七)
- 「すつぼんに」……………(二二)
- 「すつぼんを」……………(一九)
- 「捨子ちやと」……………(四)
- 「すてつべんから」……………(一〇)
- 「捨てる藝」……………(九)
- 角田川……………(二〇五)
- 「隅つゝへ」……………(七〇)
- 「關寺で」……………(三五)
- 「關守の」……………(三〇)
- 「雪隠の」……………(一八五)
- 「關手形」……………(三七)
- 「錢なしの」……………(三〇)
- 「せめて色」……………(五)

【す】

【せ】

- 「疝氣をも」……………(三六)
- 「線香が」……………(三四)
- 禪寺……………(七五)
- 「禪寺は」……………(七五)
- 千住……………(六)
- 「先生と」……………(二四六)
- 「船頭の女房」……………(三五)

【そ】

- そうどく……………(三七)
- 「そうどくに」……………(三七)
- そうばん……………(三四)
- 「そうばんの」……………(三四)
- 「草履取り」……………(二六)
- 「そこ、掻いて」……………(二八)
- 「そこら中」……………(二七)

【た】

- 訴訟……………(五二)
- そだか……………(二六)
- 「剃つた夜は」……………(一八〇)
- 「袖口を」……………(三四)
- 「その手代」……………(二九)
- 「算盤を」……………(二九)
- 太神樂……………(八四)
- 「太神樂ぐるりは」……………(三三)
- 「太神樂ばかりを」……………(八四)
- 「大黒の」……………(二六)
- 「太鼓の値」……………(三五)
- 「大職冠」……………(二七)
- 「橙は」……………(七)
- 「抱いた子に」……………(二八)

- 「大名は」……………(三三)
- 薪能……………(三〇)
- だきもり……………(三〇)
- 「だきもりの」……………(三〇)
- 「茸狩は」……………(三〇)
- 「たそがれに」……………(七六)
- 立ちのまゝ……………(四七)
- たて板……………(四一)
- 「立白に」……………(七五)
- 田中の局……………(三七)
- 「旅戻り」……………(二〇八)
- 玉菊……………(二〇六)
- 玉津島……………(一九五)
- 「袂から」……………(一九四)
- 「太夫職」……………(一九四)
- 太夫坊……………(三〇八)

- 樽拾ひ……………(二八二)
 - 「樽拾ひとある」……………(二八五)
 - 「樽拾ひ目合ひを」……………(二八二)
 - 「談義僧」……………(二五三)
 - 談義僧……………(二五三)
 - たんこぶ……………(二三三)
- 【ち】**
- 「ちつとづゝ」……………(二五〇)
 - 「ちつぽけな」……………(二八四)
 - 血の道……………(二四〇)
 - 「血の道も」……………(二四〇)
 - 「乳貰ひの」……………(三五五)
 - 仲條……………(二七〇)
 - 「仲條は」……………(二七〇)
 - 「町内の」……………(三二)
- 猪牙……………(二五)
- 【つ】**
- 朔日丸……………(二四五)
 - 杖つきの……………(五〇)
 - 「杖つきの」……………(五〇)
 - 「つき合で」……………(三三三)
 - 「附木突」……………(八四)
 - 附木突……………(八四)
 - 辻切……………(二九五)
 - 「辻切な」……………(二九五)
 - 「辻地藏」……………(二六三)
 - 辻番……………(二七〇)
 - 「辻番へ」……………(二七〇)
 - 「土、ねば」……………(三五五)
 - 坪皿……………(三二)
- 出女……………(二二六)
- 【て】**
- 「出女の」……………(二二六)
 - 出格子……………(二四五)
 - 「出格子へ」……………(二四五)
 - 出しな……………(二四八)
 - 手妻……………(八三)
 - 「手代共」……………(二七九)
 - 「出てうしやう」……………(二〇七)
 - 「手拭に」……………(四九)
 - 「田樂を」……………(二九四)
 - 「天人も」……………(九六)

てんれき……………(二四〇)

【と】

- 東慶寺……………(三三)
 - 豆腐の湯……………(三〇九)
 - 「通りもの」……………(二九二)
 - 通りもの……………(二九二)
 - 灯笼……………(二〇六)
 - 「灯笼に」……………(二〇六)
 - 「燈籠の」……………(二四二)
 - 道ろく神……………(三三)
 - 年神……………(七三)
 - とつげつしても……………(三二)
 - 「隣から」……………(七六)
 - 飛びげた……………(三四〇)
 - 富……………(二七八)
- 「供船へ」……………(二六四)
- 「鳥さしが」……………(二〇一)
- 「取次に」……………(二二五)
- 取廻し……………(三五)
- 「取揚婆」……………(二二)
- 取揚婆……………(二二)
- 【な】**
- 「無い奴の」……………(八七)
 - 長局……………(二四〇)
 - 中の町……………(二二)
 - 「長嘶」……………(一九三)
 - 「長屋中」……………(三三)
 - 「中宿で」……………(二八三)
 - 「泣きかけも」……………(二〇一)
 - 「瀧の葉」……………(二〇九)
- 「椰の葉を」……………(二〇九)
- 投入……………(二二)
- 「投入の」……………(二二)
- 「仲人を」……………(二七六)
- 名残の裏……………(二六七)
- 七種……………(九九)
- 「七種を」……………(九九)
- 七つ……………(二〇一)
- 七つの星……………(二六八)
- 鍋いかけ……………(九)
- 生酔……………(七三)
- 「生酔の」……………(二八二)
- 「生酔は」……………(二七三)
- 「生物を」……………(三七)
- 「浪一つ」……………(一九五)
- 「習ふより」……………(八七)

奈良茶飯……………(三〇)
なり……………(一〇八)
「なり初めの」……………(三三)

【ニ】

「煮うり屋の」……………(二六)
「二階から」……………(二九五)
ニヶ國……………(一〇八)
「ニヶ國に」……………(一〇八)
にぎく……………(一〇三)
「逃げた時や」……………(一八四)
「二三間」……………(三四〇)
にち……………(二〇三)
「日本の」……………(三〇〇)
二百……………(一五五)
「日本勢」……………(二八)

「女房が」……………(一〇三)

「女房と」……………(二五二)

「女房は蚊屋を」……………(二六)

「女房は酔はせた」……………(二〇二)

「女房を」……………(二四六)

「鶴の」……………(四九)

【ぬ】

「縫ひ物を」……………(二八四)
「縫紋を」……………(六七)
「糠袋」……………(三四七)
「ぬか味噌に」……………(一九三)
「ぬけた齒に」……………(二五六)
ぬけ参り……………(二五四)
ぬし屋……………(二七九)
塗桶……………(三七)

「塗桶へ」……………(二九二)

「塗桶は」……………(三七)

【ね】

「根津の客」……………(二四八)
ねすの番……………(八九)
根ぞろへ……………(六八)
「根ぞろへの」……………(六八)
「寝てゐるは」……………(二六六)
ねぶと……………(二七九)
子祭……………(二二六)
念頭ぶり……………(二三四)
「年禮に」……………(二六一)
のびの手……………(二九〇)

【の】

「のびの手で」……………(二九〇)
「法の聲」……………(三二)

【は】

「蠅打で」……………(三七)
「墓桶を」……………(三〇)
派が利かす……………(五三)
「袴着にや」……………(八六)
馬喰町……………(九〇)
「羽子板を」……………(一八九)
箱王……………(三九)
「箱王が」……………(三九)
はこの子……………(三二)
「はこの子の」……………(三二)
箸休め……………(三三)
羽白……………(八)

「耻かしさ」……………(一六四)

「島から」……………(三五)

はぢげもの……………(二五八)

「撥貸して」……………(二六〇)

「鉢巻も」……………(八)

初鯉……………(三四)

「初鯉家内」……………(三四)

「初鯉ふん込」……………(二四九)

「初鯉薬の」……………(二八八)

八朔……………(八三)

「初旅へ」……………(二九六)

「初物が」……………(九)

「はつ雪に」……………(三三)

「鼻紙で」……………(二〇八)

「鼻聲で」……………(二四四)

「花なればこそ」……………(三五)

「花賀の」……………(二六六)

「花守の」……………(一〇七)

「花嫁の」……………(三三)

「母親の」……………(二四四)

「母親は」……………(二二)

はんに……………(二五九)

「はやり風」……………(二四七)

拂藏……………(二〇七)

「腹立てば」……………(二五)

針とがめ……………(一五)

「張肱を」……………(二〇四)

「針ほどを」……………(二八)

「張物に」……………(二七四)

「張物を」……………(二四)

「春までば」……………(二五九)

「羽織着て」……………(三六)

「伴頭は」……………(三八)
「半人で」……………(三三)
「半分は」……………(二五)
「半兵衛」……………(四)

【2】

「日傘」……………(六七)
「髭ぬきの」……………(二六)
「引越の」……………(二五)
「一網に」……………(三九)
「いかり」……………(四九)
「人の物」……………(二五)
「一人者飲まぬ」……………(三三)
「人をみな」……………(一〇)
「難棚の」……………(三〇)
「日の暮れに」……………(七一)

「緋の衣」……………(八三)
ひま入……………(三六)
「ひま入と」……………(三八)
「火貫ひの」……………(二八)
「百姓は」……………(三七)
百一つ……………(二九)
百ほど……………(三〇)
百物語……………(二九)
「百兩を」……………(一四)
適合……………(三四)
ひやうひやく……………(三)
「ひよくの」……………(七)
日和下駄……………(三〇)
「晝買った」……………(二五)

【3】

「風鈴の」……………(一〇〇)
「河豚買って」……………(二八)
ふし見世……………(二七)
「ふし見世は」……………(二七)
「ぶちまけた」……………(二八)
「舟嫌ひ」……………(二九)
舟宿……………(二九)
「舟宿へ」……………(二九)
「振袖は」……………(五一)
「古郷へ」……………(七)
振舞水……………(七〇)
踏込……………(二四)
「ふんどしに」……………(二二)
「ふんどしを」……………(二四)
ぶんどける……………(二八)

【4】

「別當は」……………(三八)
「返事書く」……………(三三)
「辨天の」……………(一九)
「辨天を」……………(三五)

【5】

「方丈の」……………(三九)
坊主禿……………(四)
法眼……………(二五)
「法眼の」……………(二五)
坊主持……………(二五)
棒つき……………(二二)
賣引……………(六)
「牡丹餅の」……………(八一)

「牡丹餅を」……………(六五)
佛……………(三)
「本隆に」……………(一〇三)
盆山……………(一九)
「盆山は」……………(一九)

【6】

「舞留を」……………(一〇五)
「前髪へ」……………(二四)
「前垂で」……………(三五)
「間男を」……………(三四)
「松右衛門」……………(二六)
松右衛門……………(二六)
「松ヶ岡」……………(三三)
松ヶ岡……………(三三)
「真黒な」……………(二七)

眞崎……………(一九)
「眞崎で」……………(一九)
「松の内」……………(一九)
「松原の」……………(三)
「祭から」……………(三三)
「まゝ事の」……………(二八)
「迷ひ子が」……………(二五)
「迷ひ子の」……………(四〇)
「鞠場から」……………(九)
「丸顔な」……………(二四)
丸山……………(二六)
「丸山へ」……………(二七)
「丸山で」……………(二六)
稀人……………(二五)
「萬歳の」……………(二六)
「饅頭に」……………(二九)

【み】

蜜柑籠……………(一〇七)
 見越の松……………(三二)
 「見知りよい」……………(三〇五)
 「水かめで」……………(八六)
 水茶屋……………(一一)
 「水茶屋へ」……………(一一)
 見たふし屋……………(三四七)
 「道盛は」……………(三四)
 見附……………(一五)
 「見附から」……………(一五)
 「見に行つて」……………(二〇七)
 「見のがしに」……………(二六七)
 「身の伊達に」……………(九七)
 三圍……………(一八五)

「三圍の」……………(二九四)
 「三圍を」……………(一八五)

脈所……………(四)

「脈所を」……………(四)

明星……………(三三)

「明星が」……………(三三)

みやうもん……………(一八六)

【み】

「昔から」……………(七八)
 夢を食ひ……………(二八〇)
 むぐつて……………(三四三)
 むく鳥……………(五)
 「むく鳥が」……………(五)
 「向ふから」……………(三九)
 「武藏坊」……………(八八)

無常門……………(一九)

「棟上を」……………(三八)

「紫屋」……………(一九)

紫屋……………(一九)

【め】

目合ひ……………(二八二)
 「目合ひ見て」……………(二八二)
 「迷惑な」……………(三〇九)
 「飯焚に婆」……………(五九)
 「飯たきに百」……………(三〇九)
 「飯時と」……………(二九)
 飯盛……………(二五五)
 「めつちちは」……………(一〇四)

【も】

「餅はつく」……………(二四)

元吉原……………(一六)

「戻る猪牙」……………(二九)

物狂ひ……………(二三)

紅葉見……………(一〇〇)

「紅葉見の」……………(一〇〇)

「貰ひ乳に」……………(二五七)

【や】

屋形……………(一五)
 「屋形から」……………(一五)
 「約束を」……………(二八六)
 「役人の」……………(二三)
 「厄拂」……………(二四七)
 厄拂……………(二四七)
 「屋敷替」……………(三〇四)

「保昌は」……………(三三)

「家内喜多留」……………(一九七)

家内喜多留……………(一九七)

「藪入に」……………(六八)

「藪入のうち」……………(二四七)

「藪入の出がけ」……………(二九三)

「藪入の綿」……………(八八)

「藪入の供へは」……………(二六)

「藪入の何に」……………(三三)

「藪入の二日は」……………(三三)

「藪入を」……………(四九)

「病犬」……………(三三)

「山のいも」……………(三二)

「病上りいたゞく」……………(二九)

「病み上り日本の」……………(二四)

「病上り母を」……………(一八)

「鐘持は」……………(一五四)

「やわ／＼と」……………(一九)

【ゆ】

「夕立の」……………(二七)
 「幽霊に」……………(三二五)
 「雪打を」……………(三三)
 雪見……………(三三)
 「雪見とは」……………(六三)
 湯の花……………(六八)
 「指の無い」……………(八〇)
 「指を切る」……………(三六五)
 「湯屋へ来て」……………(二四)
 「百合若の」……………(三五)
 ゆるがしい……………(二〇)

【よ】

- 「よい事を」……………(二三)
- 「よい娘」……………(二五)
- 「夜が明けて」……………(二五)
- 「よけの歌」……………(三六)
- よけの歌……………(三六)
- 「横町に」……………(三九)
- 「義貞の」……………(七一)
- 「よし町へ」……………(五)
- 「よし町で」……………(二六)
- 吉徳稻荷……………(一九)
- 「よしなあと」……………(二七)
- 吉原神社……………(一九)
- 「夜そば切立聞」……………(二六)
- 「夜そば切ふるへた」……………(二七)

- 「四日から」……………(二九)
- 「四辻へ」……………(二九)
- 「嫁の部屋」……………(三七)
- 「四里四方」……………(三四)

【り】

- 「律義者」……………(三六)
- 「流星の」……………(四)
- 「療治場」……………(二六)
- 「療治場で」……………(二六)
- 兩介……………(一七)
- 「兩介は」……………(二六)
- 「料理人」……………(三〇)
- 「れ」……………(三〇)
- 「禮者」……………(二〇)

【ろ】

- 「蓮根は」……………(三三)
- 「勞咳」……………(二八)
- 「勞咳に」……………(二八)
- 「蠟燭の」……………(二五)
- 「蠟燭を」……………(二五)
- 六阿彌陀……………(二)
- 六夜待……………(二四)
- 論語よみ……………(二三)
- 【わ】
- 「若後家のこすいで」……………(二七)
- 「若後家のふしやうく」……………(二八)
- 「若殿が」……………(二九)
- 「脇差を」……………(二九)

- 綿つみ……………(二七)
- 「綿つみは」……………(二七)
- 「和藤内」……………(二七)
- 和藤内……………(二七)
- 「笑ひ止む」……………(二六)

—了—

瓊音著述目錄

俳諧音調論	明治三十三年八月	新	社
俳句評釋(俳諧講演集の内)	明治三十八年三月	金	港
蕉風	同 年五月	同	同
さへづり	同 年九月	南	江
新古、俳諧奇調集	明治三十九年三月	鷗	聲
俳句講話	同 年十一月	東	亞
俳論史	明治四十年四月	文	祿
俳句研究	同 年五月	東	亞
東海旅行圖會(田山花袋、小栗風葉、小杉未醒と共著)	同 年七月	修	文
俳句の作法	同 年十月	同	同
さくら貝	同 年十二月	同	同
俳句階梯	明治四十一年五月	東	亞
短評、俳句一萬	同 年十一月	修	文
俳諧、古選新選(校訂)	明治四十二年一月	東	亞

小理小情	同 年同月	國	民
三紀行	明治四十三年三月	文	成
短評俳句選	同 年五月	同	同
黙想の天地	同 年八月	東	亞
桐壺、帝木、空蟬の講(新釋源氏物語一の卷の内)	明治四十四年六月	新	潮
芭蕉句選年考(大野洒竹と校訂)	同 年九月	文	成
俳話	明治四十五年七月	博	文
小品	同 年同月	俳	味
教員諸氏の爲に	大正元年十月	修	文
評註、俳句選(長尾素枝と共著)	大正二年五月	東	亞
芭蕉句選講話(春之卷)	同 年同月	丙	出
此一筋	同 年七月	東	亞
大疑の前	同 年同月	同	同
始めて確信し得たる全實在	同 年九月	同	同
新體、書翰文大全	同 年十月	敬	文
芭蕉の臨終	同 年同月	春	陽
七面鳥	同 年同月	同	同

徒然草講話 大正三年一月
 瓊音句集 同 年五月
 須磨、明石、浮標の講(新釋源氏物語二之卷の内) 同 年同月
 俳句練習法 同 年五月
 句集、高原の風 大正四年三月
 乳のぬくみ 大正四年五月
 須磨明石 同 年六月
 俳句と其作り方 大正五年一月

東亞堂
 新潮社
 新和社
 俳味社
 同 同
 同 同
 平和社
 平和社
 新和社

大正六年十月二十四日印刷
 大正六年十月二十日發行
 (定價金九十五錢)

著作權所有
 著者 沼波武夫
 發行者 東京市下谷區池の端茅町二丁目十四番地 川口 陟
 發行所 東京市下谷區池の端茅町二丁目十四番地 南人社
 振替東京三二四二一

印刷所 東京市京橋區 弓町二十五番地 三協印刷株式會社

南 人 文 庫

菊半截二百三十一頁・一冊四十五錢・郵稅四錢

第一篇 新世帯 大倉桃郎著

著者は家庭小説家として既に名あり、此書は家庭の讀物たらしめんとして其才筆を揮へる滑稽小説也、新世帯の記、鶏の糞、鎌倉へ、故郷の手紙の四篇を収む、何れもとりぐら面白きものなり。

第二篇 怪談情話 室津鯨太郎著

本書には三つの情話を集めたり、鴛鴦の誓には戀死んだ許嫁の娘、妹の體を藉りて其男と同棲せし物語、振袖火事はお露とお染の戀を描ける丸山の怪火、嬌賊は巨商の娘お雪の死についての昔の馴り話。

第三篇 大正蠻骨傳 弓館小鰐著

萬朝報記者にして天狗俱樂部員なる著者、特意の才筆を揮つて剛健なる學生の物語を綴る文章洒々落落、記事又痛快淋漓。

第四篇 兒童常識問答 室津鯨太郎著

無味乾燥なる教育を死せる教育と喝破せる著者が、靈妙なる筆と面白き解釋は子女をして容易に科學、理學、天文、地理、歴史、醫學の智識を知るのみならず、父兄も亦一讀して大に得る所あるべし。

再 版

奇 拔 放 奔 の 史 眼

秀 吉 論

室津鯨太郎著 杉浦非水裝幀

美裝箱入四六版布表
紙金文字入三百二十頁
定價一圓二角
郵稅八角

著者多年の蘊蓄を傾倒して本書を著せり、之を單に一個の英雄傳として見るも、所論陳套ならず濼測として近代人の胸奥に觸る、古英雄の一舉手一投足、悉く現代に對照して諷刺あり諧謔あり皮肉あり、蓋し青年修養書として本書の右に出づるものあらざるべし。

時事新報曰 概世の英傑豊臣秀吉が人と成りを縦横の觀察批判を加へし者史眼の精練は一概に言ふ可からずと雖も、筆鋒の奇勁考察の辛辣讀者をして驚畏の眼を眩らしむ

やまと新聞曰 蓋世の英雄秀吉を各方面より評論したるものにして其戰略、智略、外交手腕、群臣操縱術、人心收攬法より私行情事に至るまで英雄の心理を遺憾なく解剖したるは流石に著者の史眼あるを感ぜしむ文章亦流暢なり。

大阪朝日新聞曰 豊臣秀吉を評傳した著作は今日迄既に可なりな數に達してゐるが其の内本書は此の古英雄を自由に觀察批評して彼の行動心事を別決し現代青年も秀吉を如何に觀るかといふ點を極めて趣味深く明快に叙述したのを特色とする末尾に「秀吉年譜」を添へたのも深切で青年の讀み物として甚だ適當なものであらう。

コ-71

讀賣新聞
漫畫記者

近藤浩一路君著

並に挿繪裝幀

漫畫道中記

中版二百五十頁
表紙木版
凸版百二十頁
定價七十一錢
郵稅六錢

第六版

東海道五十三次
夏の本會路
四國腕白旅行
信州横斷記
富士川難船記
馬上富士登山記

著者は現代漫畫界に於ける巨擘なり其飄逸にして酒脱たる筆致は當肩代を並ぶる者なし。本書收むる漫畫全景百餘個は個々別々に古來の名所を寫し來り之に添ふるに著者獨特の輕妙なる文章を以てす旅行案内たるのみならず又以て鎖閑無二の伴侶なり

沼波文士著

やなぎ樽評釋 (第二輯)

(近刊)

最新俳句作法

(近刊)

364
314

終

